

二九二 **〔小夜礎〕**

シテ刑部の妻。ツレ刑部貞時。子松井(姉娘)。子峯鶴(妹娘)。ワキ最明寺  
實信(時頼)。時秋の暮。

最明寺入道實信、其名を名のりて鎌倉へ歸りし上は刑部の本領を相違無さやう決定すべしといふに、刑部夫婦、娘二人と共に打ち喜び、貧しさに馴れたる業として妻は機を織り、子は砧を打ちて夜もすがら實信を慰むることを作れり。(新)

備考此曲前半を逸せり。或曲の後の替なるべしと思はる。最明寺入道修行の途次刑部の家に宿りし時の物語なり。

古 元弘の變

二九三 **〔高德〕**

シテ兒島高德の亡靈。ワキ都の僧。所美作院庄。時春。

旅僧院庄の作樂の宮に詣て、高德の靈に逢ふ。(明治卅五年刊金剛本)

備考明治卅四年春西川半二郎新作。

二九四 **〔童堂〕**

前シテ般若寺觀喜壽丸。後シテ大宮權現。ツレ圓寂院帥法眼長快。ワキ高師直。  
ワキツレ郎等。所近江比叡山。

後醍醐天皇戰敗れて比叡山を頼み給ひし時、尊氏高師直を將として攻め參せたるが、大宮權現の奇特なる功德により打ち敗らる。(元寫)

備考「いろは名寄」に笑堂といふ曲名あり。此誤傳なるべし。

二九五 **〔小夜衣〕**

シテ鹽谷判官高貞。ツレ高貞の妻。ワキ山名時氏。ワキツレ郎等。所出雲。

高師直、鹽谷高貞の妻に思をかけ、屢々文を送り居るも従はざるを憤り、終に讒して

叛人となす。後高貞尊氏の討手山名一黨に攻められ、居城に火を放つて妻と共に死す。(正、新、元寫)

備考「横山名寄」に高貞とあるは或は此曲の假名なるべし。

二九五 **〔大塔宮〕**

シテ熊野權現。ツレ大塔宮。ツレ從者(光林坊玄尊、木寺相模、岡本三河坊等數名)。ワキ竹原。所紀伊三熊野。

大塔宮熊野に身を隠さんと郎等を従へ山伏の姿となりて出で立ち給ひし途次、熊野十津川にて宿を借りしが、その家に病人ありて加持を乞ふ。せん方無く心を籠めて祈り給ふに熊野權現病者にうつり、其山伏の貴き人なることを告げて奇特を示す。(新)

二九六 **〔太刀沈〕** 別名太刀奉

シテ新田義貞。ツレ脇屋義助。ツレ郎等。所相模稻村崎。時夏。

義貞鎌倉を撃たんとて稻村崎に太刀を沈むることを作れり。(明治刊本)

備考高木半作文、觀世清廉作譜、明治新作謡なり。刊本二種、始のものは明治十六年大西村松聲譜を附して太刀奉と稱し刊行したるものなり。

二九七 **〔義興〕**

シテ新田義興。ワキ旅僧。所武藏矢口。

旅僧矢口の渡にて義興の靈に逢ひ、讀經して成佛せしむ。(正、新)

備考「正徳本」(觀世)と「新謡曲百番本」(喜多)と事柄は同じけれども文所々相違せり。

二九八 **〔鳳駕迎〕**

シテ楠木正成。ツレ名和長年。ツレ兵士。ツレ衛士。所兵庫。

楠、名和、鳳駕を迎へ奉ることを作る(明治刊本)

備考高木半作文、觀世清廉作譜の新作謠曲。

二九九 みせと 湊川 がは 別名 みせとがはくすのき 湊川楠・現在楠 げんざいくすのき

シテ楠木正成。子方正行。ワキ高師直。トモ從者。所前攝津櫻井。後攝津湊川。

楠木正成櫻井にて正行に別れ、後湊川に討死することを作れり。(新、剛)

備考名寄に正成とあるは此曲の假稱にや。

三〇〇 くすの 楠露 つゆ

シテ楠木正成。ツレ恩地滿一。トモ從者。子方正行。所攝津櫻井。時夏。

櫻井の里に、正成、正行を諭して古郷に歸らしむ。(觀)

備考聞く處によれば喜多流櫻井の曲によりて或人が文を作り改め、觀世清廉が節附したるものなりといふ。

三〇一 さくら 櫻井 ゐら

シテ楠木正成。トモ太刀持。子方多門丸(正行)。ワキ恩地左近滿一。所攝津櫻井。時夏。

櫻井の里にて、正成、正行を諭して古郷に歸らしむ。(喜)

備考聞く處によれば或地方に寫本にて傳はり居たるを、明治廿二三年の交改訂したるものなりといふ。

三〇二 くすの 楠 のき

シテ楠木正成の靈。ツレ正行の母。子方正行。ワキ湊川の僧。所河内千劍破。

湊川より出でたる僧、河内の國に正成の跡を弔はんとして正行母子に逢ひ、適々命日なる由を聞きて其墓所に詣で、又其家に至りて夜もすがら經念佛す。正成の靈經文に引かれて現れ、正行を諭し、又昔の軍語をなす。(古寫)

三〇三 幽霊楠

シテ楠木正成の靈。ワキ旅僧。所攝津湊川。

楠木正成の靈、老人に化して旅僧に宿を與へ、昔を語りて廻向を乞ふ。(新)

三〇四 花櫓 正行

シテ楠木正行。トモ正行の臣。ワキ吉野の僧兵。ワキツレ同。狂言正行從者。所大和吉野。時春。

正行兵を擧げんとして吉野山に陣を構へ櫓をあげさせたるに、衆徒其狼藉を憤り之を攻めんとて押し寄せ來る。正行短冊を附けたる矢一條を放ち、歌を以て此寄手と和ぐ。(元、元寫、剛)

三〇五 辨内侍

シテ辨内侍。ツレ侍女梅枝。ツレ從者。ワキ楠木正行。ツレ正行從者。ツレ高師直郎等數人。狂言與丁。所大和吉野。

高師直の郎等、師直が心を寄する辨内侍を奪ひ去らんとす。楠木正行道に行き逢ひて之を救ふ。(評)

三〇六 大森彦七

シテ鬼神(前は美女)。ワキ大森彦七盛長。

大森彦七、正成を亡したる勳功により恩賞を賜はり、悦びの田樂を催さんとして、行く道に、美女に化したる正成一黨の亡靈の彼を取らんとするに逢ひたるが、佩きたる太刀の威徳にて難を免る。翌日正成の靈鬼神となりて來り、彼の名刀を奪はんとしたるも同じく果さずして歸る。(新)

備考文中此名刀は壇の浦にて惡七兵衛が海に落したるを江豚といふ魚が呑み、百餘年の後漁夫の網に羅りたるなりとせり。江豚の項參照。

夫 豊 臣 氏

三〇七 **高野参詣** 別名 高野詣・高野参

シテ豊太閤の母の靈。子方豊太閤。ワキ豊臣家臣。ワキツレ從者。所紀伊高野山。時春。

豊太閤、亡母の菩提を弔ふ爲高野山に詣で、其亡靈に逢ふ。(元寫、評)

**備考**「太閤記」に「文祿三年三月十五日大阪本丸に於て由巳法橋新作の謠、芳野花見、高詣参詣、明智、柴田、北條、金春八郎に仕舞を沙汰し候へと兼て仰せつけられ其傳を受けさせ給ふ。御能を遊ばし簾中方に見せ参らせられ候はんためかや」と見ゆ。

三〇八 **吉野詣** 別名 吉野参詣・吉野花見

シテ藏王權現。ツレ天女。子方豊太閤。ワキ太閤臣下。ワキツレ同。所吉野山。時春。

豊太閤吉野山に遊び、藏王權現の化現に遇ひ、吉野山の縁起を聞き、又様々の奇特を見る。(元寫、評)

**備考**「太閤記」には吉野花見とせり。高野参詣の備考参照。

三〇九 **明智討** 明知討 別名 明智

シテ羽柴秀吉。トモ從者。ワキ明智光秀。所京。時六月。

秀吉明智を討つことを作る。(元寫、評)

**備考**高野参詣の備考参照。

三一〇 **北條**

シテ北條氏政の靈。ワキ五山の僧。所相模小田原。時秋。

旅僧が氏政の靈に逢ひ、其自殺したる當時の物語を聞くことを表として、豊臣氏をほめたる作なり。(評)

備考高野參詣の備考参照。

三二二 柴田討 芝田討 柴田

シテ柴田勝家の靈。ワキ尾張の僧。所近江北の庄。時四月。

柴田勝家の靈、所縁ある旅僧に昔を語り、その弔にて修羅の苦患を免る。(元寫、評)

備考高野參詣の備考参照。

三二二 豊國詣

シテ豊太閤の靈。ツレ明の臣下遊擊將軍。ツレ同行唐人。ツレ神主吉田兼見。

ワキ朝臣。狂言社人。所山城東山。時春。

朝臣豊國神社に詣でたるに、折しも大明國の敕使來り拜し、共に豊公の神靈に逢ふ。

(元寫、評)

七 雜 【日本】

三二三 紅葉狩 維茂(是持)

シテ鬼神(前には上菫)。前ツレ鬼神の化したる女。ワキ平維茂。トモ從者。所信濃戸隠山。時九月廿日あまり。

平維茂鹿を追ひて戸隠山中に入り、紅葉狩せる一團の美女に引き止められて酒に酔ひ臥したるが、戸隠明神の靈夢によりて其鬼女なることを知り、やがて之を退治す。(五) 備考「二百十番謡目録」に觀世小次郎の作とせり。「言繼卿記」の永祿九年六月廿日の條及天正四年十月十三日の條に是持の曲名見ゆ。觀世流「元祿版謡本」の一種に此曲名を施と記せるがあり。又「松尾名寄」に金吾將軍といふ曲名見えたるは惟ふに此一名なるべし。

三二四 清時田村 清時

前シテ泊瀬觀世音。後シテひくりの大將かんやしやう。ワキ田村清時。所前大和泊瀬。後陸奥三の濱。時春。

田村清時、奥州三の濱の鬼神を退治せよとの宣旨を蒙り、泊瀬觀音に詣でたるに、觀音一疋の名馬を賜ふ。清時之に乗り觀音の加護によりて鬼神を亡す。(元、元寫、剛)  
備考 現今の金剛本清時には次第と道行とを削り文章も多少改竄せり。又名寄に清瀧田村とあるは此曲名の誤傳なり。

三二五 〔現在千方〕 別名 千方

シテ藤原千方。ツレ鬼。ワキ紀友雄。ツレ從兵。トモ從者。所伊勢鈴鹿。紀友雄、藤原千方を亡したることを作る。(新)

備考 世子六十以後申樂談儀に千方の曲名見ゆ。

三二六 〔滿仲〕 滿中 別名 仲光・美女御前

シテ滿仲の臣仲光。ツレ多田滿仲。子方美女御前。子方幸壽。ワキ慧心僧都。狂言仲光從者。所攝津多田。

美女御前寺にあつて學問を勵まず武事にのみ心を寄せ居たるを、父滿仲憤りて仲光に命じ殺さしむ。仲光己の子幸壽を討ちて美女を助く。(觀、寶、剛、喜)

備考 能本作者註文に世阿彌の作とせり。

三二七 〔住蓮〕 重蓮 別名 住蓮坊

シテ住蓮の母。ツレ住蓮法師。ワキ三河判官季實。所前山城黒谷。後東海道磨針山。時秋。

内裏の上童、玉蟲、松蟲の二人が、公方の許を得ざるに剃髪したる科に座して、黒谷の上人罪せられんとしたる時、住蓮代りて捕へらる。かくて東へ送らるゝ途に斬られたるも、佛徳によりて蘇生し、やがて赦免を得。(元寫)

三二八とき [時有]

シテ名越遠江守時有の靈。ワキ旅僧。所越中外山。時三月。

六波羅方の武者名越時有の靈、旅僧に敗戦の様を語つて廻向を乞ふ。(正)

三一九つね [植田] 上田いさむね入間

シテ入間の某。ツレ入間家臣植田。ワキ六波羅の臣。狂言従者。所京六波羅。

入間の某、永年訴訟のため在京し居たる間に、家人多く離散し盡したるが、獨植田某残り居て清水に主の行く末を祈り、靈夢をえて主を本領に安堵せしむ。(元寫、正)

三二〇とも [鞆] 別名とも鞆源左衛門

シテ鞆源左衛門。子方鞆正氏。ワキ小玉何某。所京六條河原。

鞆源左衛門、宇治橋の合戦に捕へられ、六條河原に斬られんとしたるに、子正氏名乗

つて出で終に身代に立つ。(元、元寫)

備考「言繼卿記」天文廿三年七月廿九日の條、音曲(謠曲)の本貸借のことを記せる中に此曲あり。當時一般に謠はれしものと見ゆ。又名寄に鞆、鞆源左衛門、鞆源右衛門とあるは皆此曲の誤なり。

三二二しゆん [春榮]

シテ増尾種直。トモ小太郎。子方春榮丸。ワキ高橋權頭。ワキツレ早打。狂言高橋従者。所伊豆三島。

増尾春榮、宇治橋の合戦に囚人となり、高橋權頭に預けられ居たるを、兄種直共に誅せられんとて尋ね來る。春榮家人なりと言ひ罵りて兄を助けんとしたるも果さず。終に共に斬られんとしたるが、折しも鎌倉の早打來りて春榮の誅を免さる。春榮やがて高橋の養子となる。(五)

備考「能本作者註文」に世阿彌の作とせり。



三二二 權頭 權守

シテ北條の臣權ノ二郎。ツレ權ノ三郎。ワキ北條。狂言北條の臣。所山城梅の尾。

權頭の弟二人、兄の生捕られしを聞き、共に死ななため主君北條に暇を乞ひたるも許されずして思ひ煩ふ。折しも、兄の牢を破りたる由傳ふるものあり、兄弟喜びて宴をなす。(貞、元寫)

三二三 籠尺八 別名尺八

シテ新野小太郎。ツレ小次郎。ワキ代官吉川某。所京六波羅。

自訴のため鎌倉にありし新野小太郎、都に留めたる弟小次郎が罪を得て籠舎の身となりしを開き、都に歸り共に入牢し、弟の死を救はんとす。代官吉川、兄弟の情と小太郎の繼母の義とに感じて兩人の命を助く。(元、元寫)

備考兄弟籠に在る時尺八を吹きて最期を悲む事あるによりかく名づく。「申樂談儀」には單に尺八ともかきたり。又名寄に籠尺八とあるは此曲の誤なり。「文安田樂記」に尺八の曲名見ゆ。猿樂大成以前田樂にもありたる曲と見えたり。

三二四 梅 勘

惡七別當梅勘の靈。ワキ嵯峨の僧。所常陸筑波山。時春。

僧、靈夢に従ひ筑波山に至りて、平家の侍惡七別當の靈に逢ふ。亡靈弔を乞ひ此山にて戦死したる昔語をなす。(元寫)

三二五 治親 春近・春親 別名磯屋(磯屋)

シテ磯屋十郎治親。ツレ傳澤田。ツレ居鶴太郎。ツレ同次郎。トモ從者。子方玉若。狂言居鶴太夫季次。所相模鎌倉。

治親、舅なる居鶴太夫に謀られて召捕となり、鎌倉に籠舎せしめらる。こゝに其子玉

若も同じく謀られて博澤田と共に召捕られ來りしかば、互に心を合せて籠を破り、主從三騎陸奥に下る。(明曆外、元寫)

【備考】能本作者註文に作者不明とあり。「糺河原勸進猿樂記」に同日寛正五年四月七日に演能(異本には右近とあり)のこと見え、又「親元日記」に寛正六年三月九日觀世が演ぜしこと見ゆ。此等觀世流の記録には皆治親(春近)とあれど「禪鳳習道目錄」には磯屋の名を列ねたり。金春方にて磯屋と云ひしにや。

三二六 資時

シテ劉復亨。ツレ蒙古の兵。ツレ資時の母。子方武藤資時。所筑前博多。大宰少貳經資の子資時、母に暇を乞ひて蒙古の軍と戦ふことを作る。(明治卅八年刊本)

【備考】日露戦争の時池内信嘉新作し、觀世清廉節附したるものなり。

三二七 菊池 別名立尾

シテ島津三郎。ツレ菊池藤左衛門妻。ツレ菊池城主。子方千若。ワ・菊池の臣立尾某。所肥後菊池。

肥後の菊池城主、島津方と争ひて島津方の者を討ちたる爲、島津憤り、大軍を率ゐて菊池城を攻む。城中に千若と云ふ小人あり。父に代りて陣頭に戦ふ。島津三郎之を見て哀れに思ひ、千若と一騎討して之を生捕り、其功績を賞して城中に送り返し、無念を忘れて寄手を引く。(元寫)

三二八 岩瀬 石瀬

シテ島津の臣岩瀬某。ツレ島津五郎。ツレ浮洲太郎。ツレ浮洲の兵。狂言島津家臣。所薩摩清龍寺。時春。

島津家督相續の紛擾を作る。(貞、元寫)

三二九 かんらのたじふ  
〔甘樂太夫〕

シテ安綱の妻(小太夫)。ツレ甘樂太夫朝正。ツレ甘樂の御臺所。子方小太郎。龜若。ワキ譜代の臣安綱。ツレ長澤の源藏。所信濃碓井。時秋。

上野甘樂の城主朝正、下野足利の住人あれまの兵衛景信と遺恨ありて、彼に生捕られ長澤の家に籠舎せらる。朝正の妻子、家臣安綱夫妻と力を合せ、安綱の妻を長澤に仕へしめて終に朝正を救ひ出し、後敵景信を討つ。(新)

三三〇 くろがは  
〔黒川〕 くろがはえんねん  
別名黒川延年

シテ泰山府君。ツレ會津方寄手大將。ツレ寄手の兵。ワキ黒川遠江守。トモ從者。所奥州。時秋。

奥州の住人黒川遠江守、會津豊前守と戦ひ、敗戦の餘決戦せんとする前夜、八幡大菩薩の靈夢に逢ひ、重代の太刀を焼いて泰山府君を祭りたるに、即ち戰場に泰山府君力

を添へて敵を亡す。かくて黒川自害せんとせし命を延ぶ。(元寫)

備考 一名を黒川延年といへる「延年」とは黒川の名にや、將「延命」の誤にや。又名寄に黒川遊年とあるは此黒川延年の誤傳なり。

三三一 せきと  
〔關戸〕 せきとはやかは  
別名關戸早川

シテ早川某。ツレ早川の子藤太。ツレ早川の臣數名。トモ早川從者。子方關戸の子花若。ワキ關戸兵庫。ツレ關戸の臣數名。狂言關戸從者。所下野。

關戸兵庫、早川某と争ひ、早川の子藤太を囚人とす。早川憤り、關戸の子花若の寺にあるを捕へ來り、關戸の館を攻めて花若を關戸の矢表に立たしむ。關戸此に漸く非を覺り、互に和睦することを得たり。(元、元寫)

三三二 こばやし  
〔小林〕 おののち  
別名内野合戦

シテ山名氏清の遺臣(後に小林上野介の死靈附く)。ツレ巫子、ワキ僧(山名の

一類)。所山城八幡。

山名氏清の一類なりし僧、山名の遺臣に行き逢ひ、小林上野介が内野に勇戦したる物語を聞く。(貞、元寫)

備考「能本作者註文」に宮増作。

三三三 勝頼

シテ武田勝頼の靈。ツレ北條氏康の娘(勝頼妻)の靈。ワキ安房小湊の僧。所  
甲斐都留部。時春。

旅僧身延山に行かんとして途に勝頼夫婦の靈に逢ふ。(新)

三三四 村山

シテ上野の臣村山某。ツレ上野の妻。子方松若。ワキ西方代官長尾某。ワキツレ  
郎等。狂言侍女。所讃岐西方。時秋。

村山某。其主上野某が訴訟の爲に鎌倉にありて生害したるを聞き、其妻子を慰むる所に、代官長尾某討手に向ふ。村山、主の妻子と共に戦ひて長尾の郎等を斬り、終に長尾を降参せしむ。(元、元寫)

備考「能本作者註文」に小次郎作とあり。

三三五 廣元 廣基

シテ津輕六郎廣元。ツレ津輕太郎時則。ツレ郎等。ツレ女。ワキ安原豊後守秀  
房。ワキツレ郎等。狂言從者。所陸奥。

廣元、同國の安原豊後に捕へられ、籠舎させられしを、一族の時則聞きて憤り、婦女を安原に近かしめ謀りて廣元を援ひ出す。時則、廣元、途に遭ひて共に歸らんとする時、安原、郎等を率て追ひ來りたるが、山中に戦ひて反て廣元等に殺さる。(貞、元寫、評)

備考「能本作者註文」に彌次郎作とあり。

十八 雜 【支那】

三三六 【范蠡】 別名 伍子胥

シテ西施。ツレ鬼神(伍子胥の死靈)。ワキ范蠡。狂言船頭。

范蠡西施を伴ひて五湖に至り、苧羅山の日輪權現に詣でたる歸途、舟子伍子胥の死靈の舟を覆さんとするに逢ひたるが、權現の加護によりて鎮むることを得たり。(貞、元寫)

備考「能本作者註文」に作者不明として伍子胥を擧ぐ。

三三七 【咸陽宮】 別名 けいか(荆軻)

シテ秦始皇。ツレ花陽夫人。ワキ荆軻。ツレ秦舞陽。ツレ大臣。狂言官人。所咸陽。

・荆軻、秦舞陽、始皇を刺さんとして、秦の叛將樊於期の首級と燕の地圖とを持ちて始皇に

見え、既に意を果さんとしたるも、花陽夫人の琴の秘曲に聞き酔ひて、終に事破れたるを作る。(觀、寶、剛、喜)

備考「能本作者註文」に作者不明とあり。

三三八 【項羽】 別名 美人草

シテ項羽の靈。ツレ虞氏の靈。ワキ草刈男。所烏江野。時秋。

項羽の亡靈、烏江にて草刈男に昔を語ることを作る。初め亡靈舟人に化して草刈男を對岸に渡し、舟賃にとて美人草一本を乞ふことに物語を起したれば、一に美人草とも云ふ(五)

備考「栗田口猿樂記」には其初日永正二年四月十三日に美人草を演じたること見え、「禪鳳習道目錄」には項羽の名を列ぬ。「能本作者註文」に項羽を世阿彌の作とせり。

三三九 【高祖】 別名 星祭・星

シテ明星の神。ツレ高祖。ツレ項羽。ワキ韓信。ツレ紀信。所烏江野。

韓信紀信の忠節により、明星の軍神高祖を助けんことを約し、高祖が星祭を行ふと共に現れて項羽の軍を破りたることを作る。(元寫) **夕七星** 二八六

**備考**「春日拜殿方諸日記」に寶徳四年二月十三日の薪の能に觀世太夫が漢高祖カンノカウソウを演じたること見ゆ。「能本作者註文」に小次郎作とあり。

**張良** 三三〇 **長郎別名現在張良** 辰久郎

シテ黃石公。ワキ張良。所下邳の土橋。

高祖の臣張良、黃石公に兵法の奥儀を學びたる故事。(五)

**備考**「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に小次郎作と見ゆ。

**呂后** 三四一

シテ漢の文帝。ツレ呂后。ツレ戚夫人の靈。ツレ韓信の靈。ツレ彭越の靈。ワキ

朝臣。時春。

韓信彭越等の怨靈によりて呂后の病彌々増るを、文帝劍を抜いて先づ戚夫人の怨靈を刺し、餘の怨靈をも退散せしむ。(明曆外、評)

**備考**「能本作者註文」に彌次郎作。

**諸葛** 三四二

シテ孔明の靈。ワキ曹操の臣起信。

起信功成りて身退きたる後、蜀の國に至りて孔明の靈に逢ひ、其昔語及軍法の物語を聞く。(元寫)

**會盟** 三四三 **別名下和** 三四四

シテ趙王臣下藺相如。ツレ趙王。ツレ趙王臣下。子方秦王。ワキ秦王臣下。狂言  
秦王臣下。

趙に趙璧といふ寶玉あり。秦王之を得んと欲し會盟して秦の十五城と代へんことを約し、彼の玉を取る。されど其約を果さず、趙の臣藺相如怒りて單身秦王に見え、終に玉を取り返す。(元、元寫)

### 第五 仇討

#### 一 曾我兄弟

三四四 **〔切兼曾我〕**

シテ曾我太郎祐信。ツレ從者。ツレ曾我兄弟の母。ツレ賴朝。ツレ島山重忠。子方一萬。子方箱王。ワキ梶原景時。ワキツレ從者。所相模由比濱。一萬、箱王、由比が濱にて斬らるべかりしが、島山重忠の申乞にて助けらる。(元、元寫、剛)

**備考**後世曲を短くせんため賴朝の出づる所、又母の兄弟を訓す一條、及重忠命乞の一

條を省略したり。爲に文著しく拙くなれり。

三四五 **〔調伏曾我〕** **別名** すひつね 祐經

前シテ工藤祐經。ツレ賴朝。ツレ賴朝從者數名。後シテ不動明王。子方箱王丸。ワキ箱根別當。狂言能力。所相模箱根山。

箱根の別當、工藤の振舞を惡み、箱王を憐みて、工藤の形代を作り、不動明王を請じて調伏の祈をなす。(元祿外、元寫、實、剛、喜)

**備考**能本作者註文に宮増作とせり。「糺河原勸進猿樂記」に箱王曾我と見え、又名寄に箱王と見ゆるは共に此曲の古名なるべし。之を調伏曾我と云ひ又祐經と云ふは後世の稱歟。

三四六 **〔元服曾我〕**

シテ曾我祐成。ツレ團三郎。子方箱王。ワキ箱根別當。狂言能力。所相模箱根

箱王、箱根にて出家すべかりしを、兄祐成、箱根別當に謀りて連れ出し、道の宿に元服せしむ。(明曆外、剛、喜) クセ 六八

【備考】「看聞日記」に永享四年三月十四日仙洞にて演ぜられたる能の曲の中に 曾我五郎元服と記せるは此曲を指すなるべし。「世子六十以後甲樂談儀」の後人の記入と見ゆる一節に永正十一戊の年十月廿八日南都雨喜びの能に演ぜられたること見ゆ(當日十七番)。「能本作者註文」に宮増作。

三四七 【追懸時致】 追懸時宗

シテ曾我時致。ツレ團三郎。ワキ梶原景季。ツレ梶原家臣等。トモ從者。狂言從者。狂言少將侍女。所相模假粧坂。

けはひ坂の少將、曾我の五郎と相思ひ居たるを、景季強ひて心に従はせんとしたれば、少將逃れて遁世す。景季憤りて途に五郎を撃たんとし、反つて五郎に追はれて走る。

(新)

三四八 【和田酒盛】

シテ曾我祐成。ツレ曾我時致。ツレ虎。ツレ朝比奈三郎。ツレ虎の母。ワキ和田義盛。トモ從者。狂言侍女。所相模大磯。

大磯虎のもとにて、和田、朝比奈、曾我兄弟と酒を酌みたる時、終に争を生じ、朝比奈、時致、相舞の間に互に刺さんとしたるが、果さずして引き分る。(貞、元寫、評)

三四九 【虎送】

シテ曾我祐成。ツレ虎御前。ツレ虎御前付女。ワキ曾我時致。所相模山彦山。時四月。

祐成大磯に歸らんとする虎御前を送つて山彦山に至りたるに、時致の酒を持ちて來るに逢ひ、共に別離の小宴を張る。(元、元寫) クセ 三九二



【備考】能本作者註文に禪竹作。名寄に虎道とあるは此曲名の誤傳なり。

三五〇 小袖會我

シテ會我祐成。ツレ同時致。ツレ兄弟の母。ツレ團三郎。ツレ鬼王。狂言春日局。所伊豆會我。時五月。

會我兄弟、富士野に仇を討たんとて故郷に歸り、母に暇を乞ひ、兼ねて時致の勘當の許を乞ふことを作れり(觀、實、剛、喜)

【備考】能本作者註文に作者不明とあり。此曲の典據なる「會我物語」には此時に母に小袖を乞ふことあり。今も小袖會我と稱する程なれば初は曲中に小袖乞ふことありしなるべきも、早く省略されたりと覺しく、現今傳はるものには此事無し。

三五二 夜討會我

【別名】富士卷狩(富士牧狩)・狩場會我・打入會我

シテ會我五郎時致。ツレ會我十郎祐成。ツレ團三郎。ツレ鬼王。ツレ古屋五郎。

ツレ御所の五郎丸。ツレ兵數名。狂言狩屋の人。所駿河富士裾野。時五月。

會我兄弟、富士野の狩場より形見を故郷に送り、其夜父の仇工藤祐經を討つ。(觀、實、剛、喜)

【備考】蔭涼軒日録に寛正六年九月廿七日春日祭禮の能に寶掌が打入會我を演じたること見ゆ。「嬉遊笑覽」に「寛正の頃興行ありし猿樂能の謠の名に出雲十柄、鶴次郎、打入會我、梶原二度のかけ、星宮など書しものあり(中略)案ずるに(中略)伏木會我は夜討の事なれば是打入會我なるべし」と見えたれども、伏木會我は全く別曲なり。

三五三 十番切(甲)

シテ會我祐成。ツレ二の宮(女)。ツレ會我時致。ツレ新開次郎。ツレ新田四郎。所駿河富士裾野。時五月。

會我兄弟、二の宮に導かれて仇工藤を討ち、やがて立ち向ひたる者十數人を斬り伏せて祐成も終に討死したることを作る。(評)

備考夜討曾我の後は時致の戦ふ様を作り、之は祐成の討死の様を作れり。

三五三【十番斬】(乙)

シテ曾我五郎。ツレ同十郎。ツレ新開次郎。ツレ仁田四郎。ツレ五郎丸。ツレ軍勢數人。所駿河富士裾野。時五月。

これは夜討曾我の前段の替の形なり。兄弟既に祐成けんせいを打ちたる後、五郎は新開と戦つて之を追ひ行きたる後に、十郎仁田と戦つて終に討たる、ことを作れり。かくて夜討曾我の後段に續くものなり。(明治四十五年刊觀世清久元滋訂正本)

三五四【赤澤曾我】 別名幽靈曾我

シテ曾我祐成の靈。ワキ旅僧。所駿河富士裾野。

旅僧祐成の靈に逢ひて跡を弔ふ。(正、元寫)

三五五【御坊曾我】 あんぼう曾我(恩報曾我)・御房曾我

シテ伊東九郎助宗。子方御坊。ワキ久上寺住職。ワキツレ從僧。狂言能力。所越後久上。所春。

曾我の末弟御坊、伊東の養子となりて久上の寺に登り居たるが、花見の席に己の身上を知り、折から登山したる伊東に悲みてこの事を語る。伊東安からず思ひ、連れ行かんとし居るも、住僧に怪められ、又御坊に諫められて立ち歸る。(元寫)

備考「能本作者註文」に作者不明。名寄に花見曾我とあるは此一名なるべし。

三五六【禪師曾我】 別名久上(久我美)

シテ久上の禪師。ツレ曾我兄弟の母。ツレ丹三郎。ツレ鬼王。ツレ久上從僧。ワキ伊東九郎助宗。所前伊豆曾我。後越後久上。時夏。

前鬼王、團三郎、曾我兄弟の形見を持ちて曾我に歸り、兄弟の母に之を届く。母文を

持たせて兩人を末子なる久上禪師の許に至らしむ。久上禪師の養父伊東助宗、曾我兄弟敵討の責の身に及ばんことを憂ひ、久上の寺に禪師を攻む。折から來りたる母の文を見て禪師養父の心を知り、木戸を開いて切つて出でたるが、終に捕へられて鎌倉に送らる。(元寫、寶、觀、剛、喜)

備考「能本作者註文」に久我美の名を擧げ作者不明とせり。現實朱本觀世本行文甚しく異れり。又觀世本には後段の文を見ること無し。名寄に文削フミキ又は文削會我フミキとあるは此曲の一名なるべし。

三五七 伏木曾我 節木曾我

シテ曾我祐成の靈。ツレ虎。ワキ從者。所駿河富士の裾野。時夏。

大磯の虎。富士の裾野井手の爲ニに祐成の跡を弔ひて其亡靈に逢ふ。(貞、元寫、評) 六七六九三

備考「親元日記」に寛正六年三月九日觀世が演じたること見ゆ。「能本作者註文」に伏見

曾我の名を掲げ世阿作としたるは此曲の誤なるべし。或は又花見曾我の誤か。

三五八 大磯

シテ虎御前の幽靈。ワキ旅僧。所相模大磯。時冬、雪の夜。

虎の亡靈、旅僧に讀經を乞ふ。(正、新)

二 雜

三五九 内海

シテ松若の母。ツレ松若乳母。子方松若丸。ワキ内海某。狂言内海家人。所尾張野間。

松若母子、乳母と共に白拍子にいでたち、仇なる内海某を討つ。(元寫) 七セ二人町子 (二人神子) 八六

備考「能本作者註文」に小次郎作。

三六〇 **千人斬** 千人切・千人伐

シテ源左衛門。ワキ旅僧。狂言里人。所陸奥阿武隈川。

阿武隈川の源左衛門、或旅人に其父の斬られたるを憤り、千人斬の願を立て、日毎路次に人を斬り、既に百人になりし時、來かゝりし旅僧此事を聞き、残る九百人の命に代らんため自ら敵なりと名のり出づ。源左衛門其僧形なるを力なく思ひ、物語る間に、僧の教化に動かされて終に髻を切り、弟子となり、斬りたる百人の菩提を吊ふため共に修行に出づ。(貞、元寫)

備考「能本作者註文」に作者不明。

三六一 **大聖寺** 大性寺ちかたよ親任(近任)

シテ那須十郎親任。子方兄、花菊丸。子方弟、千満丸。ワキ大聖寺藏王院尊堯。狂言能力。所上野金澤。時春。

大聖寺の稚見花菊兄弟の親の敵に成澄といふ者あり。一日大聖寺の本堂に閉ぢ籠り、花菊を渡さざれば此本堂を焼くべしと脅す。師尊堯は花菊に落ちよと云ひ、花菊は自ら出で、討たれんと云ひ、弟千満は兄に代らんと云ひて決せず。かゝる間に能力成澄に酒をすゝめ之を酔はしめて本尊を他へ移すことを得たり。尊堯之を聞き、今は焼かるゝとも恐無しとて、兄弟の傳那須の近任に力を合せ、兄弟をして成澄を討たしむ。(元)

備考「能本作者註文」に彌次郎作とあり。

三六二 **檀風**

前シテ日野資朝。後シテ不動明王。子方梅若。ワキ帥の阿闍梨。ツレ本間三郎。トモ本間從者。後ツレ船頭。狂言追手。所佐渡。時夏。

父日野資朝の流されたる後を慕ひて佐渡に渡りし梅若丸、父が本間三郎に斬られたるを見て其仇を討ち、帥の阿闍梨と不動明王との助けによりて逃れ歸る。(明曆外、寶、

剛、喜)

【備考】「太平記」に兒の名を「阿新」としたれども之は「梅若」に作れり。「親元日記」に寛正六年二月廿八日仙洞にて觀世が演ぜしこと見ゆ。「能本作者註文」「二百十番謡目錄」共に世阿の作とせり。

三六三  
【放下僧】ほうかぞう 放家僧はうか別名放下

シテ牧野の長子。ツレ牧野の二子小次郎。ワキ利根信俊。所相模。牧野左衛門の二兒、放下僧に扮して親の仇利根信俊を討つ。(五)

【備考】「二百十番謡目錄」に金春禪竹の作とし、「能本作者註文」に近江能とせり。「能作書」に「はうか是は軍體の末風、碎動の態風なり」とあり。「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月十日其第三日目に音阿彌が演ぜしこと見え、「親元日記」に寛正六年二月廿八日仙洞御能に觀世が勤めしこと見え、「飯尾宅御成記」に寛正七年二月廿五日の觀世又三郎の能の時演ぜられたること見ゆ。又此曲中の小歌の一節は、花丸といふ曲に、都

の眺を叙したる謡として轉用せられ居れり。

三六四  
【望月】もちづき

シテ安田の家臣小澤刑部。ツレ安田庄司の妻。子方花若。ワキ望月秋長。狂言望月從者。所近江守山の宿。

小澤刑部友房、故主安田友治の妻子を助けて主の敵望月を討つ。(明曆外、元祿外、五) クセ 八九四

【備考】「松尾名寄」に鼓望月とあるは此曲に鞆鼓を打つことあるにより呼び慣はしたる假稱なるべし。

三六五  
【盛近】もちか

シテ湯淺小次郎盛近。ワキ何某の見經。ヲキツレ郎等。トモ家人。所大和金峯山。時春。

盛近吉野山にて敵見經を討つ。(新)

三六六 **安犬** やすいぬ **別名安犬丸** やすいぬまる

シテ母。子方安犬丸。ワキ笠間十郎。ワキツレ郎等。所下野。時三月。

安犬丸十四歳にして母と共に鎌倉勢と戦ひ、親の敵笠間十郎を討ちたるも、遂に多勢の爲に生捕らる。(貞、元寫)

**備考**名寄に突犬と書きたるものあり。

三六七 **比良** ひら

シテ比良の國久。ツレ郎等。子方乙若。ワキ能登ゆするぎの山伏。ワキツレ賢尊阿闍梨。ワキツレ同行山伏。狂言庄司の侍女。狂言能力。所近江比良。

能登ゆするぎの山伏、坂田の子乙若を援けて比良の城に攻め寄せ、乙若の敵國久を討つ。(元、元寫)

三六八 **穴戸** あなど

シテ穴戸小次郎(後は其靈)。ツレ那波左衛門廣次。ツレ穴戸友久。ワキ薬師寺別當。狂言里人。所下野薬師寺。時秋。

穴戸小次郎、子細あつて那波の七郎を討ち、薬師寺に隠れ居たるが、父友久之を聴き別當に傳へて小次郎に切服せしむ。後那波の兄廣次、小次郎を討たんとて寺に押し寄せたるが、小次郎の既に死せるを聞き、哀に思ひて法事をなし、反て其靈を成佛せしむ。(正)

**備考**いろは名寄「其他に薬師寺とあるは或は此一名なるべし。

三六九 **正儀世守** せいぎせしゆ 正義世守

シテ兄弟の母。ツレ兄(正儀)。ツレ弟(世守)。ワキ官人。所唐土。

正儀世守といふ兄弟、宮中にて父の敵を討ちたる科により誅せられんとする所へ、彼

等の母來りて二人を斬ることの非理を説く。かくて一人を助くる事を許されしが、兄弟死を争ひて聞かず。官人やがて母に選ばしむるに母は弟を選びて死せしめんとなせり。弟は實子、兄は繼子なり。官人母の心を憫み遂に二人を免す。(明曆外、評)

三七〇【西寂】

シテ河野四郎道信。ワキ 努賀入道西寂。ワキツレ 西寂郎等。トモ 西寂從者。所 備後鞆の浦。時春。

西寂、伊豫の住人河野道清を高繩の城に討ちて後、一日鞆の浦にて網を引かしめたるに、網舟の中に河野の子道信隠れ居りて、西寂を殺し親の仇を報ず。(貞、元寫)

三七二【義士供養】 別名 大石

シテ大石良雄の靈。ワキ 赤穂華岳寺住僧。所 山城山科。

赤穂華岳寺の僧、義士供養の爲義士の木像を作り、やがて泉岳寺に詣でんとて東に下

る。途次山科の里にて大石の靈に逢ふ。(大正二年刊本)

備刊本二種は共に觀世流の節附なり。赤穂義士追善の爲に古本を翻刻せしものなりと云ふ。

三七三【寺坂】

赤穂の義士の中、寺坂吉右衛門に就きて作れる謠曲、シテは寺坂の幽靈なり。寫本は木版々下として書きたるもの、如し。創作の時代不明なれども義士仇討の後久しからざるものなるべし。(寫本、觀世流節附)

第六 世話巷説

一 主従

三七三【三社詫宣】

前シテ照日の前。後シテ照日の前に乗り移りたる三社の神體。ワキ左近の尉。所伊勢鈴鹿。

前の關白基房公の姫照日の前、人の讒言により追はれて鈴鹿山に籠り居たるが、此處に三社の神を勸請して都に歸らんことを祈り、其奇特を拜す。(正)

三七四 土車

シテ傳、小次郎。子方深草少將の子息。ワキ僧(深草少將)。狂言里人。所信濃善光寺。

遁世したる深草少將の跡を追ひて、忠僕小次郎、若君と共に諸國を廻り、或は土車を押して露命をつなぎ、又は諺ひ狂ひてさまよふ中、善光寺にて尋ぬる少將に廻り遭ふ。(觀、喜)フセ八

備考 世子六十以後申樂談儀に「土車のくせまひ云々」と見ゆ。又同書及「能本作者註文」に世阿彌の作と記せり。「親元日記」に文明十五年三月十二日演能のこと見ゆ。

三七五 高野物狂 別名高野

シテ高師四郎。子方平松春滿。ワキ高野住僧。狂言平松從者。所常陸。後紀伊高野山。時前秋後春。

平松の臣高師四郎、主君の忘形見春滿丸が文を遺して遁世せしを悲み、狂氣して尋ね歩き、遂に高野山にて廻り遭ふ。(明曆外、觀、寶、喜)フセ六

備考 能作書に「丹後物狂、かうや、あふさか、如此遊狂云々」と見え、又「世子六十以後申樂談儀」には世子の作なりと見ゆ。「能本作者註文」には世阿の作とも記し又作者不明の部にも入る。「二百十番謠目錄」には安清の作とあり。

三七六 連獅子

シテ三木の左衛門。子方政重の息櫻丸。ワキ左近の將監。所近江越川。

故主の遺子櫻丸の誅せらるべかりしが赦免せられたる嬉しさに、越川の宿にて家臣左



近の將監兄弟宴を張り、連れ立ちて獅子舞を舞ふ。(貞、元寫)

三七七 **【武文】**

シテ秦武文。ツレ一條御息所。ツレ松浦某。ツレ松浦郎等。ツキ船頭。狂言甲の宿の亭主。狂言乙の宿の亭主。所攝津尼が崎。

一條御息所の土佐の國に下るに従ひて、秦武文尼が崎に宿る。こゝに松浦何某、自訴適ひて郷に歸らんとし、之も尼が崎の他の宿にありしが、御息所を見て思をかけ、宿の主と謀り、夜盜の討ち入りたるやうに粧ひ、混雜に紛れ御息所を奪ひて舟を出す。武文之を知り小舟に乗りて追ひたれども及はず。終に憤りて腹を切り海に投じ、怨靈となりて松浦の舟に上り、松浦を取つて海に投ず。(貞、元寫)

**備考**「運歩色葉集」に「タケモン」と傍訓し居るは誤なり。「能本作者註文」に作者不明。

二 親子

三七八 **【稻舟】** **別名最上川**

シテ稻舟の舟人。子方千満丸。ツキ桂定世。所羽前最上川。

嵯峨の大念佛にて愛兒を見失ひたる桂定世、東の果まで尋ね下り、最上川の川上にて廻り逢ふ。(貞、元寫)

**備考**「能本作者註文」に作者不明。

三七九 **【木賊】** **別名木賊刈**

シテ木賊刈の老翁(松若の父)。ツレ木賊刈男。子方松若。ツキ旅僧。所信濃原山。時秋。

子を人に連れ行かれて狂氣の如く年月を送れる木賊刈の翁の許に、失ひたる子松若、旅僧に伴はれて來り宿り、こゝに年を隔て、廻り逢ひたることを作れり。(觀、寶、剛、喜)

備考 簀木の事を文の綾とせり。名寄に簀木とあるは此假名なるべし、又伏屋とあるも此一名か。「二百十番謡目録」及「能本作者註文」に世阿作として木賊を擧ぐ。「雨窓閑語」に木賊刈。

三八〇 雲雀山

シテ乳母侍從。ツレ姫の從者。子方中將姫。ワキ横佩右大臣豊成。トモ從者。所大和雲雀山。時四月。

横佩右大臣の息女中將姫、人の讒言にて失はれんとしたるを、家臣と乳母侍從と心を合せて密に雲雀山に隠しあきたることを作れり。(観、實、剛、喜)

備考 中將姫のことを作れる曲、別に當麻あり。「粟田口猿樂記」に中將姫とあるは此曲又は當麻の別名なるべし。名寄に豊成とあるは此曲の一名なるべし。「二百十番謡目録」及「能本作者註文」に世阿作とあり。

三八一 歌占 哥占

シテ二見浦神主渡會家次。ツレ里人。子方幸菊丸。所加賀白山の麓。時四月。伊勢の渡會家次、歌占をなしつゝ、諸國を廻りて失ひたる子を尋ぬるうち、加賀の國にて廻り遭ひしことを作れり。(観、實、剛、喜)

備考 「世子六十以後申樂談儀」「歌舞隨腦記」「五音三曲集」等に曲名見ゆ。「能本作者註文」に世阿作とあり。

三八二 住吉物狂

シテ花園少將。ツレ少將の妻。子方少將の子。ワキ佐用の何某。所攝津。

花園少將夫婦、東山花見の間に見失ひたる子を尋ねて廻り、物狂となつて住吉の社に來り、十年を隔て、適々廻り逢ふ。(元寫)

三八三 **磯崎**

シテ磯崎何某。ツレ磯崎の妻。ワキ清龍寺住僧。狂言寺中の者。所近江清龍寺。下野の住人磯崎何某夫婦、七年前に清龍寺に頼みおきたる一人子花若に會はんため遙近江に來りたるに、花若は既に亡きあととなりしかば、形見の文、形見の舞衣を見て嘆き悲むことを作れり。(新、元寫)

三八四 **濱均** 濱馴・濱掾・濱平直・濱鐘

シテ右衛門尉忠助。ツレ妻。子方菊若丸。ワキ九州若屋の代官。ワキツレ同從者。狂言文の使。所前山城深草。後豊前門司。時前春秋。

深草の右衛門の子に菊若丸といふ者あり。清水に一七日參籠してありしが、靈夢に従ひ人の養子となる由の文を遣して行き方を失ふ。右衛門夫婦悲みて其行き居ると云ふ筑紫に下らんとす。途次備後の鞆にて人商人に偽かれ、夫婦共に買ひとられて門司の

濱の鹽汲に身を落し、日毎濱に出で、鹽濱を均すを業とせり。かくて計らずも主家の養子となり居たる菊若丸に廻り逢ふ。(元、元寫)

三八五 **弱法師** 羸法師・よろぼし

シテ俊徳丸。ワキ高安通俊。所攝津天王寺。時二月。

高安通俊、人の讒によりて追ひ出したる幼兒俊徳を不便に思ひ、天王寺にて一七日施行をなせしが、遇々悲の餘り盲目となりたる俊徳のさまよひ來るに逢ひ、夜にまぎれ連れて古郷に歸る。(觀、寶、剛、喜) クセ 五九五

**備考** 世子六十以後申樂談儀「五音三曲集」に曲名見ゆ。「二百十番謡目錄」「能本作者註文」に世阿作。「看聞日記」に永享四年三月十五日仙洞にて演能のこと見ゆ。此曲「通俊」を「信吉」又は「延年」に作り、「俊徳」を「信徳」に作りたるもあり。此曲より生れたる後作と見ゆる別曲天王寺物狂あり。參照。

三八六 **〔花月〕** 華月・果月

シテ花月(家次の子)。ワキ旅僧(左衛門家次)。狂言清水門前の者。所都清水寺。時春。

左衛門家次僧となりて諸國を廻るうち、清水寺の花下にて尋ねる子に廻りあふ。(五)

備考「能作書」には花月、「禪風習道目錄」には果月とあり。「能本作者註文」「二百十番謡目錄」に世阿作。

三八七 **〔相坂物狂〕** 逢坂物狂 **別名** あふさか・相坂官・藁尾官

シテ關の明神の化身(盲目の狂人)。子方稚兒。ワキ西國方の者。狂言所の者。所近江相坂。

西國の者何某、人商人にとられたる一人子を尋ねて東に下り、三年にて又都に上る。途次相坂の關にて關の明神の化身なる盲目の狂人に引き合せられ、尋ねる子に逢ふこ

とを得。(元寫) **〔東國下〕** 三八三

備考「能作書」に「丹後物狂、かうや、あふさか、如此遊狂云々」と云ひ、又「世子六十以後申樂談儀」に世子の作としてあふさかの名を挙げ、同書別所に「東國下の曲舞、「蓬萊宮は名のみしてけいりくに近き」、此だん名譽の所也。「南無や三島の明神」、より面白き所也。節は南阿みだ佛附く」と記し、又其卷末に「是ヨリ末ハ開書ノ外題ニテ、別本ニアレドモ、紙數少ケレバ、同開書ノ本ノ奥、任禮紙、書加候也」と朱書したる奥に「東國下ノ曲舞、悪キ曲舞カト覺ユル也。同ジカ、リ多シ。ナ阿ミダ佛節の上ナリシカドモ、餘リニ線ル節多クテ、時代、女曲舞ナリト云ケル也」とも記せり。曲舞の一條は南阿の節附に成り、能としては世阿の大成せしものと見ゆ。珍らしき長篇なり。「千四百番謡名寄」に一名を東國といふ由記せるは東國下の脱字なり。

三八八 **〔北野物狂〕**

シテ物狂。ワキ旅僧。所山城北野。時春。

家を捨て子を捨て、佛門に入りたる某、北野の社に詣で、咲き匂ふ梅のもとにて物狂となりたる我が子に遭ふ。(元寫) クセハ

【備考】能本作者註文「は世阿作と見ゆ。「文安田樂能記」に此名出でたるは田樂の能にも演ぜられしなるべし。

三八九 カキモノノケルウ 〔隱岐物狂〕

別名 隱岐院・隱岐院物狂

シテ鳥羽の娘。ツレ隱岐の國の人商人。ワキ旅僧(娘の父)。狂言案内者。所隱岐。

妻に別れたる悲さに、娘を故郷鳥羽に残して出家したる行脚僧、隱岐の國に行きさすらひ、後鳥羽院の御廟に参りて、己の娘の人商人に誘はれ下りたるが思の餘り狂氣せるに廻り逢ふ。(貞、元寫) クセハ 鳥羽殿(一に隱岐院) 四八四 隱岐院 五八四

【備考】能本作者註文「に隱岐物狂を世阿作とし、隱岐院を作者不明とせり。此曲を隱岐院又は鳥羽殿といふはシテが謠ふ歌を曲舞にしたる一節の稱にて、全曲をしか云ふは

當らず。「光悅本曲舞」及「天和版曲舞」にては曲舞をも隱岐物狂といへり。但「貞享番外本」は全曲を隱岐院と稱せり。「運歩色葉集」に隱岐院と小原御幸とを同曲の如く記せるは誤なり。

三九〇 カミデラ 〔三井寺〕

シテ千満の母。子方千満。ワキ園城寺住僧。ワキツレ從侶。狂言夢合せ。所前山城清水。後近江園城寺。時八月十五夜。

駿河清見が關の邊なる女、行き方を失ひし愛兒に逢はんとて清水の觀世音に祈り、靈夢を得て近江の三井寺(園城寺)に來り、適々中秋月明の夜、鐘樓に上りて鐘を撞く。寺僧驚きて出て來りたるが縁をなし、分れし後此寺に上り居りたる兒千満に廻り逢ふ。(五)

【備考】歌舞髓腦記「に此曲出づ。「二百十番謠目錄」及「能本作者註文」に世阿の作とあり。「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月四日(初日)に演ぜられしこと、「粟田口猿樂

記」に永正二年四月十四日(二日目)に演ぜられしこと見ゆ。又「世子六十以後申樂談儀」に「人の鐘の能せしに、南むきなるに鐘を右の方に置く。左鐘撞きしなり。いく度も左にあきて、右に鐘をつくべし云々」と見えたる「鐘の能」とは或は此曲を云へるにや。

三九二 〔百萬〕

別名 嵯峨物狂・嵯峨大念佛

シテ百萬(狂女)。子方百萬の子。ワキ吉野の者。狂言門前の者。所山城嵯峨。時三月。

狂女百萬、嵯峨の大念佛の群衆の中にて尋ぬる子に廻り逢ふ。(五)

備考「能作書」「歌舞髓腦記」「禪鳳習道目錄」等に百萬の名見え、「世子六十以後申樂談儀」には百萬とも「嵯峨の大念佛の女物狂の能」とも見ゆ。又同書に「昔の嵯峨の物狂の狂女、今の百萬なり」とも記し、又世子の作と記せり。古曲を世阿彌の大成せしなるべし。「能本作者註文」には同じく世阿作とあれど「二百十番謠目錄」に觀阿の作と

せるは如何あらん。又「拾玉得花」に十體風姿の第八濃體の例に此曲を擧げ、「五音三曲集」に其謠の一節を引用せり。「親元日記」に寛正六年三月九日御乞能にて觀世太夫の勤めしこと見え、「栗田口猿樂記」に永正二年四月十六日同勸進能の三日目に演ぜられしこと見えたり。

三九三 〔島廻〕

シテ狂女。子方狂女の子。ワキ江州膳所の者。狂言里人。所近江唐崎。

人商人に子をとられて心狂ひし女、唐崎にて尋ぬる子に廻り逢ふ。(新)フセ七八九  
備考島廻の曲舞に前後を附して一曲となしたるなるべし。「禪鳳習道目錄」に見ゆ。「運歩色葉集」にも曲名を列す。

三九四 〔櫻川〕

別名 櫻子

シテ櫻子の母。子方櫻子。ワキ磯部寺住僧。ツレ人商人。ツレ里人。所前日向。幕

常陸櫻川。時後春。

櫻子といふ幼兒、母の貧を救はんとて人商人に身を賣り東に下りたる爲、母狂氣になりて亦尋ね下り、常陸の國櫻川のほとりにて廻り逢ひしことを作る。(五)

備考「世子六十以後申様談儀」に曲名見ゆ。「能本作者註文」「二百十番謡目録」に世阿の作とあり。「親俊日記」に天文七年二月十三日細川殿にて觀世が演ぜしことを記せり。

三九四  
〔柏崎〕

シテ柏崎殿の妻。子方花若。ワキ柏崎の臣小太郎。ツレ善光寺住僧。所前 越後  
柏崎。後 信濃善光寺。

柏崎殿の妻、鎌倉にありし夫は身まかり、一人子花若は遁世したる由をその家臣小太郎より聞き、終に狂氣して善光寺に迷ひ行きしが、適々如來堂にて花若に廻り逢ふ。

(五)

備考「世子六十以後申樂談儀」に「うかひ柏崎などはゑなみの左衛門五郎作也。さりな

がらいづれも悪きところを除き、よきことを入られければ、皆世子の作成べし。柏崎には土車の能の曲舞をいれらる」と見ゆ。「能本作者註文」に世阿作とし、「二百十番謡目録」に江波左衛門作とせるも故ありと云ふべし。「歌舞隨腦記」「禪鳳習道目録」等にも曲名ゆ。「粟田口猿樂記」に永正二年四月十七日勸進猿樂の四日目に演ぜしこと見ゆ。

三九五  
〔飛鳥川〕

シテ早少女(母)。ツレ早少女。子方友若。ワキ京の者。所 大和飛鳥川。時夏。  
母と行き別れて迷ひ居たる幼兒友若、旅人に伴はれて飛鳥川に來り、物狂ほしくなれる母の早少女に巡り逢ふ。(喜、剛、元)ワセ五八六

備考「能本作者註文」に世阿作とあり。「飯尾宅御成記」に寛正七年二月廿五日觀世又三郎の能の時演ぜられしこと見ゆ。

三九六 隅田川 角田川・隅田河

シテ梅若の母。子方梅若丸の幽霊。ワキ渡守。ツレ旅人。所下總隅田川畔。時三月十五日。

都北白河なる吉田何某の子梅若丸、人商人に誘はれて東に下りたる後、其母狂氣して跡を追ひ東に下りたるが、隅田川の渡にて去年今月今日向ひの岸にて梅若が身まかり、今日その供養をなせることを聞き、船頭旅人等と共に墓所に至り念佛す。梅若の幽霊やがて影の如くに現れて母と詞を交す。(五)

備考「世子六十以後申樂談儀」及「歌舞隨腦記」に曲名見え、「五音三曲集」に謡の一節出づ。「能本作者註文」に世阿彌の作とし、「二百十番謡目録」に元雅の作とせり。「看聞日記」に永享四年三月十四日仙洞にて演能のこと見え、「申樂談儀」の中後人の入筆と思はるゝ一節に永正十一年十月廿八日南都雨喜びの催に演能のこと見え、「親元日記」に文明十五年三月十二日演能のこと見ゆ。

三九七 唐船 唐舟別名祖慶官人

シテ祖慶官人。ツレそんし。ツレそゆう。子方日本子二人。ワキ箱崎殿。唐土船頭。所筑前箱崎。時七月。

十三年前、唐土と日本の争ありし時日本に捕はれ、其後箱崎殿に召し使はれ居たる祖慶官人といふ者あり。日本にて生れし幼児二人と共に毎日牛馬を追ひて野に出づるを業とせり。こゝに又唐土に残し置きし官人の子二人、父を迎へんため數多の寶を持ちて來り、許されて父を連れ歸らんとす。されど日本にて生れし二兒は共に行くを許されず、唐土の子は連れ行かんとし、日本の子は引き止めんとす。官人何れの子にも従ひ兼ねて海に投ぜんとせしが、箱崎殿其哀なる様に感じて日本子二人をも連れ行くことを許し、かば、親子五人喜び勇みて故國に歸る。(喜、觀、寶)

備考「二百十番謡目録」には吉廣作とし、「能本作者註文」には作者不明とせり。「運歩色葉集」にも曲名見ゆ。又此謡より生れたりと見ゆる箱崎物狂あり。次項參照。



三九八 **箱崎物狂**

シテ千代若千代光の母。ツレそはん(千代若)。ツレそちく(千代光)。ツレ祖慶官人。ツレ官人従者。ワキ箱崎殿。所前唐土。後筑前箱崎。

祖慶官人が連れ行きし日本子二人、其母に逢はんとて箱崎に來り、狂氣せる母に廻り逢ひて唐土に連れ歸る。唐船の後日譚なり(新、元寫) **クセ** 官人が子等に語る一條に廿四孝のを作れる一章あり。これを箱崎物狂とも廿四孝九八五とも呼びて曲舞に謠ふ。

三九九 **敷地物狂** **別名** 薦物狂・菅野物狂

シテ松若の母、子方松若丸。ワキ叡山の僧。所加賀菅生。時春。

菅生(又須河すがらに作る) 何某の子松若、十二の時父母の許に文を遺して故郷を出で叡山に上りしが、年經て故郷に歸り見るに昔の家の跡も無し。悲みてこゝに七日の説法をなす。聽者の中に狂氣せる母ありて期せずして邂逅す。狂女の抱きたる薦の中より松

若の古き文の出づることにより薦物狂と名づけ、又菅生の敷地天神社内に於け説法なりしにより菅生物狂とも敷地物狂とも云ふ。(元、元寫) **クセ** 五八九

**備考** 永享四年三月十五日仙洞にて薦物狂の能を演ぜしこと「看聞日記」に見ゆ。「運歩色葉集」には敷地物狂、菅生物狂を別曲として擧ぐ。

四〇〇 **經書堂**

シテ母(家繼の妻)。ツレ若き僧(兒、花若)。ツレ若き僧(兒、松若)。

父を失ひて遁世したる二兒、清水觀音の功德により經書堂にて狂氣せる母に逢ふ。(貞、元寫)

**備考** 能本作者註文に世阿作とあり。

四〇二 **不逢森** **阿波天の森別名** 反魂香

シテ商人の娘。ツレ宿の主。ツレ僧。ワキ鎌倉の商人。所尾張河波手森。

商人何某の娘、父を慕ひて都に上らんとし、尾張の宿にて空しくなり。折ふし同じ宿に泊り合せ居たる父これを聞き知り、僧の勸に従ひ反魂香を焼きしに、其亡靈に逢ふことを得たり。(光悦、貞、元寫) **反魂香** ハハ

**備考**「流布本花傳書」に反魂香の名見ゆ。「五音三曲集」に謡の一節出づ。「能本作者註文」に世阿の作とあり。「慶長日件録」に慶長九年六月廿五日二條城にて演能のこと見ゆ。又寫本「千四百番名寄」に反こんかう。利生。現在ハンコンコウとも。唐反魂香とあり。誤なれども参考の爲掲げ置く。

四〇三 **丹後物狂**

シテ岩井何某。子方花松。ワキ筑紫の船頭。狂言岩井の家臣。狂言里人。所丹後白糸演。

丹後白糸なる岩井何某、橋立文珠に祈誓して一子花松を得、幼き程より成相寺に登せ置きしが、一日呼び下して學問の事ども問ひ試るに、博く書經歌道にも通じ居たれ

ど、猶餘技として彫をも上手に弄ぶといふ。父其彫の技を聞いて憤り、終に家を追ふ。花松やがて身を悲みて橋立の浦に投じたるが、適々筑紫の船頭に救はれ、誘はれて筑紫に下り、それより彦山に登る。一年の後、故郷戀しさに船頭と共に丹後に來り、昔の家を尋ねしに父母既に此に住まず。悲さの餘り文珠堂に一七日の説法をなしたるが、聽衆の中に狂氣となりし父の在りて廻り逢ふを得たり。(元祿外、元寫、評) **反魂香** ハハ

**備考**「能作書」に「丹後物狂、昔のふえのものぐるい也」とあり。「世子六十以後申樂談儀」に「丹後物狂、「おもふこと、く、なくてや見まし與謝の海の」、かやうの所、音曲がゆうく」と有て、音曲にて風情をする所也。それを早くいふによりて、しての風情もなし。いかにもかゝりたる音曲なるべし」、又「丹後物狂に「花の物いふは」のほろほの拍子ちやうと蹈む。拍子色どりにて蹈む也。「花の物いふは」と云ひ續くる心ねにて、つゞくるうちに、いづくよりも知らずちやうと蹈むを、今ほど、若もの、拍子を本にいひきりて蹈む也。をかしき事也」、又「丹後物狂、めうと(夫婦)いで、物に狂ふ能なりし也。まくや(幕屋?)にて、俄に、ふと今のやうにはせしなり。名ある能

となれり。然れば能も當世くを心得て、昔はかく成とのみ心得べからず』など見え、又井阿の作なりとせり。「二百十番謡目録」にも井阿作とあり。「能本作者註文」に世阿作としたるは如何あらん。「歌舞髓腦記」にも曲名見ゆ。寶徳四年二月十日薪の猿樂に金春太夫が演ぜしこと「春日拜殿方諸日記」に見え、糺河原勸進猿樂の初日寛正五年四月四日に演ぜられしこと「糺河原勸進猿樂記」に見えたり。名寄に丹波物狂とあるは此曲名の草書の誤なり。猶此原作なりといふ笛物狂参照。

四〇三 **【笛物狂】** 笛狂

シテ光澤何某。ツレ船頭。子方松若。ワキ光澤の従者。ツレ同行者。所前 上野光澤。後 近江しなの渡。時春。

光澤の何某、一人子松若を寺に上せおきたるが、學問はなさて笛をのみ吹き居たることを聞き、所領より追ひ出す。松若土地の者何某に伴はれて諸國をめぐり、近江しなの渡にて舟に乗りたるに、折から狂亂して松若を尋ねあるける父も同じく乗り合せ、

松若の吹く笛の音を聞き心づきて名乗り合ふ。(元寫、新)

備考「能作書」に「丹後物狂昔ふえ物狂也」とあり。丹後物狂参照。

四〇四 **【磯松】**

シテ直江(直井)左衛門。ツレ左衛門妻。子方磯松。ワキ観音寺住僧。所 越後直江。

直江(直井)の子磯松、久しく観音寺に登せられ居たるが、父母の戀しさに一日忍びて里に下る。父師匠の恩を思ふ心より嚴に戒めて歸したるが、歸途親不知の濱にて波にとられて空しくなる。こゝへ父母師搜し來り死體を見て打ち嘆き一首の歌を詠じたるに、日頃念ずる観音の慈悲によりやがて蘇生せり。(元寫)

備考「能本作者註文」に世阿作とあり。各種の名寄に直井とあるは此曲か又は竹雲かか一名なるべし。

四〇五 **兼元** 別名熊野詣(熊野參)

シテ下野住人兼元。ツレ兼元妻。ツレ山伏先達。ツレ同行山伏。ツレ丰王。子方花若。ワキ真木尾寺住僧。狂言能力。所和泉真木尾寺。

兼元の子花若寺にありしが、兩親の訪ね來べきに學問怠れりとて師に叱られ、寺中の池に身を投げて死す。明日兼元夫妻熊野參詣の山伏と伴ひて來り、此事を聞きて嘆くこと限無し。山伏哀に思ひ、住僧と力を合せ祈加持して蘇生せしむ。(異本元、元寫)  
**備考** 能本作者註文に近江能とあり。

四〇六 **荳** 別名禿高野

シテ荳。ツレ荳の妻。子方松若。ワキ宿の亭主。〇言宿の者。所紀伊高野。松若母子、父荳を尋ねて高野に至りたるが、女人禁制のため松若一人山に上る。松若偶々父に遇ひたるもそれと知らずして父荳のことを尋ねしに、父は去年身まかり

たりと欺きて山を下らしむ。此間に麓の宿に残り居たる母は空しくなれり。後父哀に思ひ尋ね來りてこのことを知り、その父なることを名乗りて共に亡き人の菩提を弔ふ。(貞、元寫、評)

四〇七 **爲世** 別名水無瀬

シテ爲世の妻の靈。子姉。子弟。ワキ高野の僧(爲世)。所攝津水無瀬。時秋。爲世卿(定家の曾孫)剃髮して高野にありしが、故郷戀しさに水無瀬の里に來り、適々俗に遺したる姉弟の二兒に逢ふ。行き過ぎんとするに、二兒父と知らずして母の空しくなりし日なればと弔を乞ふ。爲世家に入りて讀經するに、亡靈現れて父子の名乗をなさざるを限みかこち、二兒に父を引き合せ其身もやがて成佛す。(貞、元寫、喜)

四〇八 **生贄** 池贄・池贄・池熱

前シテ旅人。ツレ旅人妻。ツレ旅宿の主人。子方娘。ワキ神主。ワキツレ神主從

者。後シテ富士権現の使日の御子の神。所前駿河吉原。同國富士の御池。

親子三人の旅人、富士御池龍神の神事に行き逢ひ、生贄の鬮を引きたるに、其鬮娘に當る。かく親子の悲める所に、富士権現現れて之を助く。(明曆外)

【備考】言繼卿記「天文廿三年八月廿一日の條、音曲(謠曲)の本貸借の事を記せる中に池贄あり。當時廣く謠はれたりと見ゆ。又「慶長日件録」に慶長九年六月廿五日二條城にて演能のことを記せり。「能本作者註文」に世阿作。

四〇九 **【奈須與市】**(乙) 奈須與一 **【延年奈須・延年奈須與市】**

シテ藤間何某。トモ藤間從者。ツレ延年役者數人。子方花若。ツキ櫻の本の坊。ツレ千手院の三位。ツレ同宿二位。狂言能力。所越前平泉寺。時春。

越前平泉寺にて毎年花の本に延年の風流を演ずる習あり。此年の延年には奈須與一が扇を射たる所を演ぜんとして、與一の役を稚見花若に定めたるが、折しも花若の父藤間何某も延年見物に登山し、此事を聞きて萬一花若の仕損ぜんことを憂ひ、己も平家方の役を受けて若し花若射損せば家門の名折れなれば花若を射殺して恥辱を雪がんと思ふ。やがて延年の風流となりたるに花若難無く扇を射落し、一山の者を感じしめて父と共に酒宴に列す。(元寫)

【備考】曲名「禪鳳習道目錄」に見ゆ。

四一〇 **【婆相天】** 葉相天

前シテ姉弟の母。後シテ婆相天。後ツレ菩薩二人。ツレぜんくわう女(姉娘)。子方男の子(弟)。ツキ土井左衛門惟資。ツキツレ東國船船頭。ツキツレ西國船船頭。所越後。時弘應三年八月。

土井左衛門に買ひとられ仕へ居たる貧女、姉弟二人の子と共に毎日根芹妻木を取るを業とし、常に峯の觀世音に詣で居たり。こゝに東國西國の人買船、人を買はんとて來りたるがあり。土井は彼の姉弟二人を各之に賣りたれば、二人はやがて東西の舟に連れ行かれんとするに、母嘆きて海に投ず。然るに日頃念願の功德著しく、薩薩聖衆こ

こに來迎し、彼婆相天彼の母を佛所に送り、又兩兒を富貴の家に誘ふ。(元、元寫)

四二 竹雪

シテ直井左衛門の前妻。ツレ月若の姉。子方月若。ワキ直井左衛門何某。狂言直井後妻。狂言從者。所越後直江。時冬。

月若、繼母の爲に衣一重にて竹の雪を拂はせられ、雪の中にて息絶えしが、實母實姉來りて様々に勞はり、又父も力を合せて蘇生せしむ。(明曆外、實、剛、喜)

備考「能本作者註文」に世阿作とあり。「運歩色葉集」にも曲名出づ。又名寄に直井といふ曲名あるは此曲か又は磯松かの一名なるべし。

四二三 刀

別名 刀の庄・石こつみ・笈搜し

シテ刀兵衛家次。ツレ妻。子方郷の殿。ワキ先達。ワキツレ小先達山伏數人。狂言能力。所奥州刀の庄。

刀の庄なる刀の兵衛家次、先腹當腹二人の子の中、兄なる先腹の子郷の殿を羽黒山に上せおけり。一日郷の殿先達の一行に従ひて峯入の途次、家に歸り、一行と共に宿りたるが、其夜刀の家の重代の寶刀を盗みたるものあり。山伏等此事を聞き若し我等の笈の中に其刀あらば大法の如く石こつみにすべしとて一々笈を検むるに、刀は郷の殿の笈より出でたり。先達憤りて郷の殿を引き立て、やがて石こつみになし畢らんとす。折しも彼の繼母物狂となりて出で來り、郷の殿を罪に落さんためなしたる己の謀なりとて、先非を悔い代りて石こづみにならんと云ふ。先達等郷の殿の冤を知りて扶け起し、仇を恩にて報ずべしと祈加持して繼母の狂氣を鎮めしむ。(元、元寫、明曆外)

備考「能本作者註文」に作者不明。「親元日記」に文明十五年三月十二日刀の庄を演じたること見ゆ。

四一三 松山鏡

松の山鏡

シテ俱生神。ツレ娘の母の靈。子方娘。ワキ松の山家の者。所越後松の山家。

松の山家なる少女、母におくれ繼母に添ひたるが、母の形見の鏡に映る己の姿を母と思ひ、日毎に眺めて慕ひ居たる孝心により、亡母の冥途の苦患を救ふことを得たり。  
(觀、寶、剛、喜) **クセ賢女鏡** 九八四

**備考**「流布本花傳書」七卷に松の山鏡と見ゆ。今は「まつやまかゞみ」と讀めども「松の山鏡」の方正しかるべし。「能本作者註文」に作者不明。

三 夫婦

四一四 **【末松山】**

シテ都の者の妻。ワキ都の者。狂言里人。所奥州末松山。時秋。

家貧しく暮しかねて知る人を尋ね東に下りたる夫婦、奥州末の松山の邊に來り共に詠め居て、あの松山に波の越えん時まで二人の契は變らざるべしと誓ひたるが、明日來り見れば波高くして松山を越え居たり。夫婦悲みて二人の契の枯れたるを悟り、終に相別れて夫は陸奥の果まで下れり。かくて秋になり再び都に歸らんと彼の松山の邊を

過ぎたる時、物狂となりてさまよへる妻に逢ひ、又連れ立ちて都に歸る。(元寫) **クセ** 四九〇

**備考**「能本作者註文」に世阿作とあり。

四一五 **【歌屏風】**

シテ尼。ツレ中納言藤原基頼。ワキ山名玄蕃頭。ワキツレ ホンデ品治某。所備後輶。

藤原基頼、輶の住なる山名玄蕃を頼み居たるが或時山名が、さる尼より乞請けたる屏風を見るに、基頼の筆になりし梅花の畫に、亡き妻の筆の跡と見えて歌一首書きたるものなり。不審に思ひ、もと持ちたりし尼をよびて質すに、尼は則ち基頼の妻なりき。一年天文の亂に、基頼妻と共に山口を忍びいで、安藝に下らんと舟に乗りて多田の浦に過ぎたる時、海賊に襲はれ共に海に入りたるが、危き命扶かり、妻は基頼が死したりと思ひて尼となり、基頼は妻死したりと思ひて山名に頼り居たるなり。(新)

四一六 **【芦刈】** 蘆刈

シテ日下左衛門。ツレ左衛門舊妻。ワキ妻の従者。狂言里人。所攝津難波。日下左衛門零落して芦賣となり居たるが、彼を尋ねて下りたる舊妻に廻り逢ひ、再び世に出づることを得たり。(五)

備註「歌舞髓腦記」に曲名見え、「拾玉得花」に十體風姿の第九有心體として擧ぐ。又「五音三曲集」に謠の一節出でたり。「能本作者註文」に世阿作として「奥ハ善徳云ツク」と割註し、「二百十番謠目録」には禪竹作とせり。

四一七の野中清水

シテ妻。ワキ藤江の何某。所播磨印南野。時冬。

何某故あつて去りたる妻のあとを追ひ行き、印南野の野中の清水の邊にて追ひつき、再び家に連れ歸ることを作れり。野中の清水の古歌を綾とす。(正)

四一八の木引善光寺 別名木引

シテ越後直井津の者。ツレ妻。子方花若。ワキ善光寺の僧。狂言人商人。所信濃善光寺。

直井津(直江津か。原文のまゝ)の者何某、散々に零落し、後の世を願はん爲妻子と共に善光寺に参りたるが、錢なくして本尊を拜む能はず。門前に妻を残して父子二人一七日の禁足をなす。妻之を悲み終に身を賣りて其代を御戸の代に捧げたるが、彼の妻やがて善光寺造營の柚木を運ぶ木引の群に入り、謠ひ囃して柚木を引き來り、寺の門前にて又父子に廻り逢ふ。(新)

四一九の横笛

シテ横笛。後シテ横笛の幽霊。ワキ僧(齋藤瀧四時頼)。〇言里人。所嵯峨野。

建禮門院に仕へし苺萱、横笛といふ二人の美女ありしが、苺萱は越中の前司盛次、横笛は重盛の臣齋藤時頼の妻となれり。然るに讒する者ありて時頼は横笛を離別し、やがて嵯峨の往生院に入りて僧となれり。横笛悲み慕ひて往生院に到りたれども會ふこ



とを得ず。終に大堰川の千鳥が淵に投じて空しくなりぬ。時頼やがて其亡靈を弔ひて成佛せしむ。(元寫)夕七九五

四二〇【更科】更級別名更科物狂

シテ更科何某妻。ワキ旅僧(更科何某)。狂言善光寺堂守。所信濃善光寺。

更科何某妻子を捨て、源空上人の弟子となりしが、餘所ながら故郷を見んとて信濃に下り、善光寺にて一七日の説法をなしたりしに、聽衆の中に別れし妻の狂人となれるがありて思はずも廻り合ふ。(元寫)夕七八九

四二二【松浦物狂】待羅物狂別名俊貞

シテ俊貞の妻。ワキ僧(松浦の住人俊貞)。ツレ處の者。所攝津須磨。時春。

松浦の俊貞、讒により都に召し籠めらしが、事明になりて罪をゆるされ、出家して故郷に歸らんとす。途上須磨の浦にて己の妻の狂人となりて尋ね上らんとするに廻り會

ふ。(元寫、明和)夕七九四

備考「二百十番謠目錄」に福來作とあり。

四二三【由良物狂】

シテ祐兼の妻。ワキ僧(忍の右衛門祐兼)。所遠江掛川。

由良の人祐兼、花菊といふ女と馴れしを、本妻妬みて一首の歌を遣して行方知らずなれり。祐兼妻を憐み慕ひ、剃髮して諸國を尋ね廻るうち、掛川の宿にて其狂人となるに廻りあふ。(元寫)夕七八五一節は由良湊〇八五一節は佐夜中山一八五といふ。

備考「世子六十以後申樂談儀」にも「由良の湊のくせまひ」と見ゆ。

四二三【思妻】(甲)別名濱田・戀妻・戀草

シテ濱田の妻(帥の局)。ツレ濱田の侍女侍従。ワキ濱田某。

濱田の妻はもと禁中に帥の局といひし美人なるが、濱田に嫁ぎて後政長といふものに

戀慕せられ、其心を納れざる恨の爲、其夫を讒せらる。かくて濱田は流罪となりしが、やがて許されて家に歸る。此曲は妻の戀慕の情と夫の歸りたる嬉しさを作りたるものなり。(元寫、正、新)

備考此曲「元文本」には別名濱田とあり。「正徳番外本」には戀草として出で、「新謠曲百番」には戀妻として出づ。別に思妻といふ異曲あり。

四二四 〔安字〕 安士・案字

シテゆうしんの妻。ワキゆうしん。狂言文字賣。狂言召使女。所唐、かうほの里。時秋の暮。

ゆうしんといふ者、蜀の國に至りて安の字を買ひ、三年にて漸く故郷に歸り妻に逢ふことを作る。安字を以て文の綾とせり。(元、元寫)

四二五 〔錦織〕

シテ錦織の妻。ワキ錦織何某。ツレ錦織の臣小彌太。所近江錦織。時九月十三夜。

綿織何某鎌倉に召されて一年に餘り歸らざりしかば、其妻男山八幡に祈り、自ら錦を織つて御帳に奉納せんとす。九月十三夜の月前に僅ばかり残りたる錦を織り居たる處へ夫歸り來る。妻喜びたるも直には機より下らず、綿を織り終つて始めて機より下り、夫と共に之を奉納す。(正)

四二六 〔鳥追〕 別名鳥追船(鳥追舟)

シテ日暮の妻。ツレ傳左近の尉。子方花若。ワキ日暮何某。トモ從者。所薩摩日暮里。時秋。

日暮何某、自祈のため十年に餘つて京に在る間に、傳左近の尉主君の妻に思をかけ、その適はざる口惜さに主人母子を役して水田の鳥を追はしむ。適々何某自祈適ひて歸り來て、此體を見て左近の尉を斬らんとしたるが、母子の乞にて其罪を許す。(觀、

寶、剛、喜) クセ 四九二

【備考】「二百十番謡目録」に金剛作。「能本作者註文」に作者不明とあり。

四二七 **籠太鼓** 弄太鼓

シテ關清次の妻。ワキ松浦何某。狂言牢番。所筑紫松浦。

夫が牢を破りしたため、捕へられて籠者になりし女、狂氣を装ひて憫を乞ひ、夫の罪の赦免を得ることを作れり。(五)

【備考】籠中にて太鼓を打つことあるにより此名あり。「禪風習道目録」に曲名見中。「能本作者註文」及「二百十番謡目録」に世阿作とあり。「飯尾宅御成記」に寛正七年二月廿五日觀世又三郎の能の時演ぜられしこと見ゆ。

四二八 **舟** 戻

シテ山伏。ツレ同行山伏。ツレ都の者の妻。ツレ人買二人。子方子。ワキ都の

者。狂言里人。所近江矢走の浦。時秋。

落ちぶれたる都の者、東に下らんとする途次、鳩の湖のほとりに妻子を残して石山寺に詣でたる間に、人買船來りて彼等を奪ひ去りぬ。男岸に歸り舟の遠くなるを見て嘆く處に、山伏二人來り、此事を聞き、行力にて船を祈り戻し、かの妻子を奪ひ返す。  
(新)

四二九 **横山** 別名草刈

シテ横山十郎治直。ツレ横山妻。ツレ初雪。ツレ初雪從者。ワキ久米川。狂言久米川從者。所武藏。時夏。

武藏の横山治直、本領に離れ、從弟久米川を鎌倉に止めて訴訟せさせたるが、久しくなりて久米川歸り來らず、從類皆離散して家には唯夫婦と一疋の馬とのあるばかりになりぬ。こゝに鎌倉龜江が谷に初雪といふ女あり。横山が世にありて鎌倉に住みし頃の情を忘れず、此武藏まで訪ひ下りたるが、折しも横山が馬の餓えんことを憂ひて

自ら草刈に出でたる留守なりければ、彼の妻初雪を家に待たせ、烏帽子直垂を持ちて途に横山を迎へ、之を着さしめて共に歸り、夏狩に出でたりと云ひ繕ひて酒宴を開く。適々久米川安堵の御教書を得て歸り來り、共に愁眉を開きて悦び祝ふ。(元寫)

クセ二九五

備考極めて長篇なり。「世子六十以後申樂談儀」に草刈と見え、又「草刈の能に、「この馬は唯今餓死に候べきや」より、たとへ引きし「騷行かずく」など云ひくたして、「こゝは忍ぶの草枕」とうたひ出し、目遣ひし、さと入し體、此道にあきては天降りたるもの也共」など記せり。此文の對照により草刈は横山の一名又は古名なること明なれり。「運歩色葉集」にも草刈の曲名出づ。「能本作者註文」には世阿作とせり。「看聞日記」に永享四年三月十四日仙洞にて演ぜられしこと見え、「粟田口猿樂記」に永正二年四月十四日粟田口勸進猿樂の第二日目に演ぜられしこと見ゆ。いづれも曲名は横山とあり。

四三〇 あるそめがは **【藍染川】** そめがは 愛染川別名染川

シテ宰府神主と契りし女。後シテ天滿天神。子方梅千代。ワキ宰府神主。ツレ左近の妻。トモ神主從者。狂言神主の妻。所筑前。

宰府神主のまだ都に在りし頃契りし女、二人の中に生れし子を引きつれて筑紫に尋ね下りたるに、神主の後妻の爲に欺かれて染川に身を投げ空しくなる。神主途に之を知り、祈をなして蘇生せしむ。(觀、寶、春)

備考「能本作者註文」に作者不明。

四三一 あるそめがは **【思妻】**(乙)

シテ鷹飼忠兼の妻。ワキ宇治より出でたる僧。所山城北山本。

鷹飼の妻、別れたる夫を慕ふあまり狂氣してさそらひ歩くことを作れり。(元)クセ二五七

備考同名異曲あり。

四三三【鞠】  
別名鞠物狂。けまり

シテ故主の妻。ツレ侍女數人。子方故主の娘。ワキ左近の尉。所薩摩。時春。  
左近の尉、在京中に身罷りたる故主の形見と文とを持ちて薩摩に歸りたるに、亡き人の妻之を見て心亂れ、庭上に形見の蹴鞠を弄び、悲み嘆くことを作る。(元寫、貞、評)

四三三【碓】  
碓

前シテ蘆屋何某の妻。後シテ其亡靈。ツレ侍女夕霧。ワキ蘆屋の何某。所筑前  
蘆屋の里。時晚秋。

蘆屋の何某、都にありて歸らざりし間に、妻は夫を慕ひわびて終に空しくなりぬ。何某歸りてその亡魂を弔ふ。妻の夫を慕ふあまり、涙にくれつゝ碓を擣つことを以て綾としたり。(觀、實、剛、喜)

備考「世子六十以後申樂談儀」「歌舞髓腦記」に曲名見ゆ。又名寄に槌打碓とあるは此曲が碓を聞くにあらずして打つことを作れる爲呼び慣はしたる名なるべく、槌打碓は其誤傳なるべし。「能本作者註文」に世阿作とあり。又「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月十日其第三日目に音阿彌が勤めしこと見え、「親元日記」に寛正六年二月廿八日仙洞にて觀世が勤めしこと見ゆ。

四三四【木播】

シテ木幡左衛門。ツレ木幡の妻。ツレ乳母。ツレ妻の母。ワキ伏見なる妻の里  
よりの使。所山城木幡。時秋の暮。

木幡左衛門嫉妬と醉狂とにて妻を殺したるが。悔いて佛門に入り菩提を弔ふ。(貞、元寫)

備考「能本作者註文」に世阿作。「翁草」の名寄の文飲の曲名の下に「木幡の別名か云々と割註せり。

四三五 をみやめし 女郎花 別名頼風

シテ小野頼風の靈。ツレ頼風の妻の靈。ワキ旅僧。所山城男山。時秋。

旅僧男山の女郎花を眺め居たるに、小野頼風の靈現れて男塚女塚の謂を語り、其夜僧の弔を受けて妻の亡靈と共に再び現る。(五)

備考「能本作者註文」に世阿作とし、「二百十番謠目録」に龜阿作とせり。「粟田口猿樂記」に永正二年四月十六日勸進猿樂(金春)の第三日目に頼風を演ぜしこと見ゆ。「運歩色葉集」には女郎花の名を出して頼風の名を出さず。「千四百番名寄」に頼風を現在女郎花の一名と記せるは誤なり。又名寄に男山とあるは或は此異名なるべし。

四三六 しきみ 櫛塚

シテ代官の靈。ツレ代官の妻の靈。ワキ都の僧。狂言里人。所伊賀はらじろの里。時春の暮。

はらじろの里に櫛塚とて殺されたる代官夫妻の墳あり。櫛生ひ繁り居て人これを手折れば亡者の執心のために必ず命をとらる。旅僧此事を聞き哀に思ひて二人の靈を弔ひ成佛せしむ。(元、元寫)

備考「能本作者註文」に彌次郎作とあり。

四三七 おもひでがは 思出川

シテ兵部少輔行家の妻の靈。ワキ旅僧。所丹波井原。

或御所の上北面なりし行家、兵亂の爲に財を奪はれ、從類は離れ唯夫婦と子一人になりて丹波路に落ちたるが、井原の里思出川のほとりなる里の家己一人入りて憐みを乞ひたるに、都の間者なるべしとて責め殺さる。門に残りし妻子これを聞きて思出川に身を投げて空しくなりぬ。此作はこれより幾年かを経て旅僧偶々こゝを過り、弔をなして三人を成佛せしむることを作る。(新)

四 孝子

四三八 **【佐保川】**

シテ梅定の娘、姉。ツレ同妹さく女。ツレ三笠山の山神。ワキ春日社人。狂言社人。所大和春日。時晚秋。

梅定の娘二人、母の病を養はんとて殺生禁斷の佐保川に魚を取る。社人之を見出して打擲し姉娘を死に至らしむ。妹悲みて神佛に祈りたるに山神護法現れ、姉娘を蘇らしむ。(貞)

**備考** 妹娘の方に反て役多し。

四三九 **【七草】**

シテ孝能の父。ツレ帝釋天。ワキ孝能。所大和(孝能の家)。時春。

孝子孝能、家貧にして老いたる兩親を養ひかね、諸神に祈るうち、夢に教を得、片岡野の七草を取りて父母を養ふ。帝釋現れて奇特を示す。(元寫)

四四〇 **【多手利】**

シテ隙の多手利。ワキ僧。所肥後岩戸。

隙の多手利といふ者、親孝行の徳により岩戸觀音の靈驗にて富貴の身となりたることを作る。(正)

四四一 **【身賣】**

シテ太郎。ツレ次郎。ツレ僧。ワキ奥州舟の人買。所越後蒲原。

兄太郎、家貧にして父母の法事を營み難きを悲み、密に身を賣りて代金を得、僧を請ず。法事終りて弟次郎此事を知り、兄に代らんと嘆くに、人商人哀に思ひ代は二人に與へたりとて去る。(元寫、明曆外)

**備考** 「能本作者註文」に作者不明とあり。「運歩色葉集」に曲名出でたるは明曆版本に組み入れられたるためか。

四四二 **【千手寺】** 千壽寺

シテ千手觀音。ツレ貧女。ワキ眞板在の長。所陸奥眞板。時秋。

眞板(間農又は間に作る)の在の長に身を賣りたる貧女、夜毎密に出で、千手寺に父母の後世を祈る。長知りて憤り、難役を命じたるが、觀音の化身現れて力を添ふ。長亦千手寺の松木に花咲きたる奇特を見て彼の貧女の孝心に感じ、終に父母の菩提を弔ふことを許す。(貞、元寫)

四四三 **【今泉】** 今和泉

シテ芝神明。ワキ農民某。所武藏芝。

駿河の今泉の農民某、親に孝あるにより莫大の賞を賜ふ。某喜びて江戸に上り、先づ芝神明に詣で、奇特に逢ふ。(江戸中葉刊本)

備考農民の名は五郎右衛門、恩賞は田畑九十石、時は天和二年三月なり。御朱印案文

の寫刊本の序文にあり。牛田恭治といふ者の作文作譜。

四四四 **【孟宗】**

シテ晋の孟宗。ツレ妻。所支那。時冬。

孟宗、父命を重んじ、諸天に祈念して雪中に笋を得たることを作る。(正)

四四五 **【羊】**

シテこうしやう。ツレ妻。ツレこうはく。ワキ桂陽國の臣下。所支那。時冬。

こうしやう夫婦、國王秘藏の羊を盗みたるを、子こうはく訴へ出で、我が身の功に代へて父母の命を乞ふ。(貞、元寫)

備考「能本作者註文」に近江能とあり。

四四六 **【厚婦】**



シテ厚婦。ツレ母。ツレ國王。子方太子。ワキ臣下。狂言臣下。所天竺舍衛國。舍衛國の太子無言の病にかゝり、醫師の勸により數の實に代へて柔和なる女の生肝を求む。其高札を見て貧女厚婦母を養はんため生肝を奉らんとす。天其孝心を嘉し、太子の病を治して厚婦を救ひたるが、厚婦は之が爲に太子の妃に立てらる。(正)

五 戀 附男色

四四七 戀重荷 別名おもに

シテ山科庄司。後シテ其幽靈。ツレ女御。ワキ官人。狂言下人。所京。時秋。

女御を垣間見て戀になりたる菊作りの賤の男、彼を悟らしめんとて持ち難き重荷を與へ、之を擔ひて百度千度御庭を歩まば女御の姿を見ることを得べしと云はれたるを眞と思ひ、彼の重荷を擔ひ歩いて終に空くなる。後、幽霊現れて女御に怨を述ぶ。(貞、元寫、觀)

備考「歌舞隨腦記」にも記録あり。「世子六十以後申樂談儀」に「戀の重荷の能に「おもひ

のけぶりの立わかれ」は靜に渡る拍子のかゝり成べし。此能は色ある櫻に柳の亂れたるやうにすべし」など見ゆ又「能作書」には「戀の重荷、昔の綾の太鼓也」と見えなれば、綾太鼓といへる古曲を原として作りしことを窺ふべし。「談儀」「能本作者註文」「二百十番謠目錄」皆世阿彌の作とせり。「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月七日(勸進猿樂二日目)音阿彌が勸めしこと見え、「親元日記」に寛正六年二月廿八日觀世が勤めしこと見ゆ。

四四八 綾の太鼓

シテ庭掃の老人。後シテ其幽靈。ツレ女御。ワキ臣下。狂言臣下從者。所筑前桂の池。

女御に思を懸けたる下人、桂の池の桂木に懸けたる綾の鼓を打たば御姿を見え給ふべしと聞き、彼を悟らしめんとて作りたる鳴るまじき鼓と知らずして打ち侘び、桂の池に身を投げて死す。後幽霊となりて女御に怨を述ぶ。(元、明曆外、元寫、寶、剛)

クセ七八六

備考戀重荷と同趣向なり。戀重荷の原作なる綾太鼓を改作したるものなるべし。「能本作者註文」に世阿作。

四四九みせ【水無月祓】みづなづらひ 六月祓別名なまこし名越・みそぎ川がは

シテ女。ワキ都の男。狂言里人。所山城賀茂。時六月晦日。

播磨の室の津にて都の男に馴れし女、男を慕ひて京に上り、賀茂に詣で折からの六月祓に狂ひ居たるが、同じ心にて詣で來りたる男に廻り逢ふ。(元、元寫、明和、觀) 備考「二百十番謡目錄」に安清作とし、「能本作者註文」に世阿作とせり。又別名みそぎ川につきては「五音曲條々」に「松風村雨、はん女、みそぎ川、是等は皆戀慕のもつはら也」と見ゆ。

四五〇かぶ【加茂物狂】かものくるわ 鴨物狂

シテ狂女。ワキ神職。ワキツレ男。所山城賀茂。時四月。

相別れて三年になりし男女、賀茂の祭に廻り合ふ。(天和、元祿、寶、喜)クセ七八七 備考元祿までの謡本にはワキを賀茂の神職としたれども、現今のものは本文六枚ばかりを削り、神職の役を廢して男をワキ役とせり。「能本作者註文」に作者不明。

四五二かぶ【歌舞伎】かぶ

シテ名古屋三左の靈。ワキ出雲神職(お國の父)。所山城北野。時春。

お國の父某、お國の歌舞伎興行のため北野の社に行き、名古屋三左の亡靈のお國を慕ひて現るゝに逢ふ。(新)

四五三つゆ【露の宮】つゆのみや

シテ露の宮亡靈。ワキ苅萱重氏。所大和吉野。

昔露の宮、梅が技中納言の姫君權の上と契り、姫が吉野山に捨てられし跡を追ひて尋

ね入りしも、既に姫の空しくなりし後なりしかば、吉野川に身を投げて之も空しくなりぬ。此曲は荊萱重氏が露の宮の幽霊に逢ひ、父帝にありし事どもを奏せよとの言傳を受くる事を作れり。(新)

四五三 龍田物狂 立田物狂

シテ狂女小蝶。ワキ山本家次。ツキツレ同行者。所大和立田。時九月。

輕の里の住人山本家次、立田山に遊び三年前に契りし女の狂氣せるに廻り逢ふ。(評) 備考「和謠分國記」には曲名をたつたくるひとせり。

四五四 天王寺物狂

シテ和泉の女(物狂)。ツレ俊徳丸。ワキ信俊の家人仲光。狂言門前の者。所攝津天王寺。

高安の住人左衛門信俊の子俊徳丸、母を失ひたる嘆に兩眼瞽ひたるが、後繼母のため

に天王寺に捨てられぬ。こゝに過ぎし春の聖靈會に稚兒舞を舞ひたる俊徳丸を見て思を寄せ、文を取り交したる和泉の女あり。俊徳を慕ひて天王寺に來り狂ひ居たるが、適々俊徳丸に廻り逢ひて妹背の契をなす。(評)

備考俊徳丸の事を作る弱法師三八より生れたる作なるべし。

四五五 班女

シテ花子。ワキ吉田少將。トモ從者。狂言野上の長者。所前美濃野上。後京都賀茂。時後秋。

野上の野にて一夜吉田少將と契りし花子といへる上臈、少將を慕ひて明暮取り交はしたる扇に眺め入り、閨より出づること無かりしがば、終に宿の長に追はる。かくて慕ひ狂ひて都に上り、下賀茂の社にて少將と廻り逢ふ。(觀、寶、剛、喜)

備考「五音曲條々」に「松風村雨、はん女、みそぎがは、是等は皆戀慕のもつはら也」と見え、別に謠の一節を掲ぐ。「世子六十以後申樂談儀」歌舞髓腦記等にも曲名出づ。

「能本作者註文」及「二百十番謡目録」に世阿作とあり。此曲より轉じて作られたりと思しき類曲野上物狂あり。又此曲は夕顔の晝を描きたる扇を取り交したることを一篇の綾となしたるが、これの翻案と思しき淨瑠璃「朝顔日記」には朝顔の晝を描きたる扇とせり。

四五六の **野上物狂**

シテ花子。ワキ野上の長。所美濃野上。時秋。

野上の長、花子といふ上臈を持ち居たるが、花子一夜吉田少將と契りてより、取り交したる扇に詠め入りて聞より出でざりしかば、長憤りて追ひ出さんとするに、忽ち狂氣となり焦れ狂ふことを作れり。(元寫)

備考類曲班女の前半を一篇の謡曲に作りたるものなるべし。又名寄に野上とあるは此曲の略稱ならん。

四五七の **舞車**

シテ龜江ヶ谷の者。ツレ都の女。ワキ里人。ワキツレ同。所遠江見附。

遠江見附の祇園祭に、東西に二つの舞車を飾り、此車上にて前夜此宿に泊りたる旅人二人に舞を舞はする習あり。相別れたる男女、偶々見附に宿り、祇園祭の舞車に強ひて舞はしめられ、舞ひ歌ひつゝ思はずも相會す。(元寫、明曆外、評)クセ女の舞の歌を美人揃二九四男の舞の歌を妻戸三九四と云ひて共に蘭曲に謡ふ。

備考「能本作者註文」に宮増作。

四五八の **錦木** 別名錦塚

シテ男の靈。ツレ女の靈。ワキ旅僧。所陸奥希婦の里。時秋。

昔陸奥に、戀する男、女の門に色どりたる木の枝を立て、女の取り入るゝ毎に立て重ねて、千束になりたる時逢ふといふ習あり。此木を錦木といふ。此曲は戀せし若き男

女の亡靈が、錦木の昔を語ることを作れり。(五)

【備考】曲名「世子六十以後申樂談儀」「歌舞隨腦記」「一休題頌」等に出づ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿作とあり。「春日拜殿方諸日記」に寶徳四年二月十日の薪の猿樂に金春太夫が演ぜしこと見ゆ。

四五九 雷之鳥

前シテ化鳥雷之鳥となりし男の靈。ツレ同女の靈。後シテ權現。ワキ上人。ワキツレ從僧。所越白山。時夏。

廻國の上人、白山にて戀の爲雷之鳥に化したる男女の靈に逢ひ、又權現の奇特を見る。(元寫)

四六〇 船橋 船橋別名 佐野船橋

シテ戀せし男の靈。ツレ同女の靈。ワキ三熊野山伏。所上野佐野。時春。

人知れず行き通ひ居たる若き男女、親が通路の橋を引きあきたるを知らずして水に陥り死したるが、後年亡魂現れて山伏に弔を乞ふ。「萬葉集」の「可美都氣努、佐野乃布奈波之、登利波奈之、於也波左久禮騰、和波左可流賀倍」といふ歌に基く俗説によりて作れるものなり。(五)

【備考】歌舞隨腦記には船橋とのみ見えたれど他の古書には船橋、佐野船橋兩様に記せり。「粟田口尊應准后猿樂記」には船橋の肩に佐野と註せり。「能作書」に「さの、船橋……如此碎動風云々」と見え、「世子六十以後申樂談儀」に「船はしなどは責めて責めてふるまうたる松の風に靡きたるやうにすべし。鬼はまことの冥途の鬼を見る人なれば、たゞ面白きが肝要也」と見え、又「さの、船橋は根本群樂の能也。しかるを書き直さる。昔能なりしを田樂もしければ久しき能なり。くはしくは三道にあり。此三道は應永三十年にかゝれし程に、これより後、本に成べき能、いくらも有べし」と見ゆ。又同書に世子の作と記し、「能本作者註文」「二百十番謠目錄」にも同様に記せり。「看聞日記」に永享四年三月十五日仙洞にて佐野船橋の演ぜられしこと見え、「粟田口猿

樂記」に永正二年四月十七日勸進能第四日目に舟橋の演ぜられしこと見ゆ。

四六一 **戀松原**

シテ男の靈。ツレ女の靈。ワキ旅僧。所若狭け山。時冬。

昔松原に男を待ちつくし、雪に埋れて死したる女と、其思ひし男との靈、旅僧に昔語をなし、その弔によりて成佛す。(元、元寫)

四六二 **革袴**

シテ乞食眞福田。ツレ長者侍女草の局。ワキ行基。ワキ從僧。

地藏尊、眞福田といふ乞食を悟の道に入らしめんため、長者の姫に化して彼を戀にさそひ、終に剃髮せしめ、又行基菩薩と現れて道を教へしことを作れり。(元寫)

備考 曲中の姫の歌「眞福田が修行に出る革袴其片裾を我が縫ひける」をとりて題とせり。此歌は「夫木抄」の行基の歌「まふくたが修行に出でしかた袴われこそぬひしかそ

のかた袴」を傳へ誤りたるものなり。

四六三 **禿物狂**

シテ遠山小次郎。ツレ遠山家人。子方禿小童(地藏尊の化身)。ワキ雀森寺の僧。所京内野。時夏。

内野の地藏尊、美しき禿小童に化し、遠山小次郎といふ者を悟らしめしこと。遠山禿小童を戀ひて物狂となり、やがて覺むる由に作れり。(正)

備考 紀伊に學文路といふ地名あり。此曲名に學文路物狂の文字を當てたる事ありと見え、名寄に之より誤り轉じたりと見ゆる學文字物狂、學文物狂、學文字、較文字、較文字、鞭文字、無智文學、富士文學等の曲名あり。

四六四 **足引**

シテ比叡山侍従の律師玄快(一本賢快)。ツレ從僧。ツレ花王の從者藤若丸。

子方花王。ワキ東大寺南院住僧。ヲキツレ僧兵。所大和奈良。時春。  
叡山十壽院の僧玄快、南都東大寺の稚兒花王と相慕ひ、南都に下り足利山に相逢ひたるを、東大寺の僧兵押し寄せて攻め戦ふ。(元寫、新)

四六五 **〔花丸〕**

シテ筑波某の子花丸(後は其亡靈)。ツレ傳清次。ツレ筑波某。トモ家人。ワキ  
叡山北谷の僧。所前都より叡山まで。後常陸筑波。時前春後秋。

曾て叡山の僧と契りし筑波某の子花丸、僧を慕ひて死したる後、彼の僧尋ね下りて此事を聞き、讀經して弔をなす。(新)

備考 謠の一節に放下僧の小歌を探り用ゐたり。

四六六 **〔粉川寺〕** 粉河寺別名粉川

シテ都の者某。ツレ從者。子方梅夜叉。ワキ粉川寺住僧。狂言能力。所紀伊高

野山。時秋。

都の者某、高野山に行き暮れ、途に逢ひたる稚兒梅夜叉の情にて父と詐りて粉川寺に宿り、其稚兒と契りし事を作れり。(元、元寫、評) 四六八

備考 流布本花傳書に舞の圖出づ。「言繼卿記」に永祿九年六月廿五日嵯峨法輪寺にて演ぜられしこと見ゆ。「能本作者註文」に作者不明として粉川の名を擧ぐ。

六 雜

四六七 **〔濱川〕**

シテ濱川何某。子方花菊。ワキ宮崎の僧。所日向宮崎。

宮崎の僧、濱川何某の子花菊が勸當せられしを、申乞ひて和解せしむることを作れり。(元、元寫、寫本) 四七三

備考 流布本花傳書に舞の圖出づ。「能本作者註文」に作者不明。

四六八 **信田** 篠田

シテ千原太夫清信。ツレ千原妻。子方信田。ワキ浮島太夫。所奥州相馬。

相馬の先主死去の後、女婿小山太郎行重家督を奪はんとし、千原に命じ相馬の子信田を殺さしめんとす。千原先主の恩を忘れず、密に信田を浮島太夫の許に落し、夫婦行き訪ひて宴を張る。(新)

**備考** 名寄に相馬とあるは此曲の假稱なるべし。

四六九 **岡崎** 別名花小汐

シテ大明神神靈。ツレ神主。ツレ神主郎等。子方岡崎の息。ワキ村松彈正忠廣。ワキツレ岡崎郎等。狂言神主家人。所山城西大原。時春。

岡崎の息、家臣忠廣を従へて大原明神の花を見、其一枝を手折らんとしたるに、神主神木なればとて許さず、終に罵り合ひて別れたるが、翌日岡崎方郎等を従へて押し寄

せ、前日の恨を霧さんとす。争鬭の間に大明神の神靈現れ、花一枝を少人に與へて和解せしむ。(元、元寫、新)

**備考** 能本作者註文に彌次郎作とあり。「言繼卿記」天文廿三年七月十八日の條に、音曲(謡曲)の本數冊を貸借したる事見えたる中に此曲あり。當時一般に謡はれしこと明なり。又同書に慶長九年三月廿七日觀世太夫が演ぜしことを記せり。「新謡曲百番」(喜多流節附)に入りたる花小汐は同曲なれども文章拙し。

四七〇 **盲沙汰** 盲目沙汰別名もろを

シテ菊若。ツレ六郎。ツレ二階堂何某。ツレ信夫九郎。ワキ左近丞。所相模鎌倉。時二月。

奥州もろをの地頭源左衛門の死後、長子六郎は盲目なるにより、繼母これに事寄せ實子菊若丸に惣領を譲らしめんとて、叔父信夫九郎を頼みて鎌倉に沙汰に及ぶ。六郎の家人左近の丞亦六郎に勸めて同じく訴へ出で、御前に争ひしが、菊若兄を尊びて争は



ざりしたため深く其心を感ぜられ、終に本領を菊若に繼がしめ、之と同じ廣さの領地を別に六郎に相續すべきやう沙汰せらる。(元、元寫)

四七二 なんざた 女沙汰

シテ松澤小太郎母。ツレ月岡の妻。子方花若。ワキ鎌倉代官横山某。ワキツレ太刀取。所鎌倉。

月岡何某、親の敵舟木何某を討たんとして過ちて知音無双の松澤小太郎を殺し、面目なさに逐電す。松澤の母悲みて月岡の妻に一子花若を斬りて出せと迫り、やがて訴へ出でしかば、花若終に父の代りに斬られんとす。かくて彌々斬られんとする際に及び、松澤の母哀に思ひ訴を思ひ止りてその死を助く。(貞、元寫)

【備考】「文安田樂能記」の田樂の能の曲名中に此名あり。田樂にて古く演ぜしものか。

四七三 その 園田 蘭田

シテ神體。ツレ園田。ツレ玉兄姫。ワキ津島天王社人。ワキツレ社家郎等。トモ從者。所尾張津島。

津島の天王の祭に、國中第一の聞えある美人玉兄姫といふ神子、神樂をなしたるが、兼ねて心を寄せ居たる園田何某、神樂の半に奪ひ去る。社人憤つて翌日園田の家に押し寄せたるに、神體天上に現れ一矢の下に園田を射殺す。(貞、元寫、評)

四七三 その 守

シテ老女。ワキ瀬川何某。狂言從者。所都。

津の國瀬川何某、自訴適はざるを歎き清水に祈誓をこめたるに、靈夢を蒙り途に觀音の守を拾ひ得たり。何某正直なる心なれば、高札を逢て、其持主を尋ねたるに、守の主なる有徳の老女訪ひ來り、正直なる人に財寶を譲らんとしたるに態と落したる守なりと財寶夥多を瀬川に譲る。(元寫)

四七四 **玉取** 珠取

前シテ住吉明神。後シテ貧女の父の靈(鬼神)。ツレ貧女。ツレ玉取長者の家臣。  
ワキ 安倍晴明。狂言晴明從者。所前攝津住吉。後山城。

長者の號を得んとて善根を積む玉取長者と、不思議なる惡業に生れし貧女とを點綴して、敬神と孝行とを説きし作なり。(元、元寫) **クセ** 五九一

四七五 **谷行**

前シテ松若母。後シテ伎樂鬼神。子方松若。ワキ 帥の阿闍梨。ツレ 小先達。ツレ 同行山伏。所前京。後 大和葛城山。時冬。

少年松若、師に従ひて峯入し、山路にて病起りたるため、大法により谷行(生きながら谷間に投げ捨つる法)に行はれたるが、先達等憫みて行力の功德を以て再び蘇生せしむ。(五)

**備考** 現時各流に行はるゝものは天和貞享元祿等の謡本と文章甚相違せり。「二百十番謡目録」に禪竹作とし、「能本作者註文」に作者不明とせり。

四七六 **祇園詣**

シテ師匠。子方若君。ワキ若君從者。トモ從者。所都東山。時正月。

若君師匠に従ひて新年の吉方詣えはらまうての爲祇園に參ることを作り。(元寫)

四七七 **竈馬**

シテこほろぎ(女)。ワキにほひの君。時秋。

こほろぎ、老尼にほひの君を訪ひて、彌陀の有難さを説き聞かざるゝことを作れり。(正)

**備考** 名寄ににほひといふ曲名あるは或は此曲の一名か。

四七八 とうしんぼう **東心坊** 東心房

シテ東心坊。子方鶴若。ワキ越前宰府の仕人。トモ從者。狂言家僕。所越前。時四月八日。

東心坊といふ惡僧をもて扱ひ、里人河底に沈めんことを議し、彼が心を寄せ居たる少年鶴若を伴ひて共に舟遊に出で、鶴若の舞に見入りたる隙を見て沈めに懸く。(貞、元寫)

四七九 うぢのくるわ **宇治物狂**

シテ物狂。ワキ平等院住僧。ワキツレ舟人。狂言門前の者。所山城宇治。時暮春。日毎に宇治の里に来る物狂あり。一日平等院の住僧その名を尋ねしに、名もなき身、國里も定めずと云ひ、大會の功力に數ならぬ身も佛果を得んと、歌ひ狂ひて行くへ知らずなりしことを作る。(新)

備考前シテの一段と見ゆる一條にて終れり。或曲前段の替の形の謠にや。

四八〇 おほはらのまつて **大原詣**

シテ土器賣の翁。ワキ旅僧。狂言拍子とり。所山城深草。時冬。

旅僧大原證據の阿彌陀に参りての歸るさ、念佛しつゝ行くに、深草の里にて土器賣の翁に逢ふ。彼の翁今の念佛の有難さに物の氣覺めたりとて己の庵に伴ひ歸り、夜もすがら土器の故事を語る。翌日僧が今出川に歸る道すがら、共に出でたちて念佛を語り、次の世にて再び逢はんことを約し立ち別る。(新)

四八一 せみ **蟬丸** 蟬麻呂 さかかみ 逆髪

シテ蟬丸の宮。シレ逆髪の姫宮。ワキ官人。狂言博雅三位。所近江相坂山。

延喜の皇子蟬丸、前世の報にて生れながら盲目なりしかば、父帝其後世を助けんとて相坂山に捨て給ふ。こゝに逆髪の宮とて、同じく前業にて髪逆しまに生ひ上りたる姉

宮の狂氣したるが來り逢ひ、供に業を悲んで再び相別る。(觀、寶、剛、喜) クセカ。

**備考**「世子六十以後申樂談儀」には逆髪とせり。「二番十番謡目錄」に世阿作。「能本作者註文」には世阿作として掲げたれども「別作と云説有り」と割註せり。

四八三 **〔松 蟲〕**

シテ男の靈。ツレ友の靈。ワキ酒賣。所攝津阿部野。時秋。

昔、阿倍野の松原を友と二人して過ぎし人、折から松蟲の聲面白かりしかば、友を殘して彼の蟲の音を慕ひ千草の中に分け入りしが、終に歸り來らず。翌日見れば草露に伏して空しくなり居たり、此曲は此空しくなりし男の靈、残りたりし友人の靈と共に、阿倍野の松蟲の聲にひかれて酒賣る店に來り、酒汲み交はして松蟲の音に憧るゝことを作れり。(觀、寶、剛、喜)

**備考**「世子六十以後申樂談儀」の後人の入筆と見ゆる中に、永正十一年十月廿八日南都の雨喜びの能に演ぜられしことを記せり。

四八三 **〔餓 鬼〕**

シテ惡友。ワキ北國方の僧。所越中立山。時秋孟蘭盆會。

北國の僧、餓鬼道に墮したる昔の惡友の十三回忌に、立山に至りて弔をなし、亡者に逢ひたることを作れり。(正)

**備考**「能本作者註文」に世阿作。

四八四 **〔現在善知鳥〕**

シテ獵師。ワキ卒都濱領主。トモ從者。所陸奥卒都濱。

卒都の濱の領主、鷹狩に祕藏の鷹を逸し、興さめて歸る途に獵師に行き逢ひ、獵の手ぶりを見る。(正)

**備考**善知鳥を現在物にしたる後作なり。

四八五 **善知鳥** 烏頭別名烏頭八瀉

シテ獵師の亡靈。ツレ獵師の妻。子方千代童。ワキ旅僧。所曾越中立山地獄。陸奥卒都濱。

旅僧立山禪定して陸奥卒都の濱の獵師の幽靈に逢ひ、其着たる麻衣の袖を切りて陸奥に届けよと言傳てられ、陸奥なる彼が妻子の許に届けて共に供養をなす。(五)外濱風八五

備考鳥を殺したる報により地獄に墮したることを「陸奥のそとの濱なる呼子鳥鳴くなる聲はうとよやすかた」といふ歌に基く俗説によりて作れるものなり。此歌「謠曲拾葉抄」に「定家郷の歌なり。夫木集に入る」とあれども「夫木和歌抄」に無し。「禪風習道目錄」に曲名出づ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿作とあり。「親元日記」寛正六年二月廿三日の條に曲名見え、同じく廿八日に觀世が演能のことを記せり。又「粟田口猿樂記」に永正二年四月十三日勸進猿樂(金春)の初日に演ぜられしこと見ゆ。

竹田金春炭蓮の弟子に與へたる傳授書の寫に曲名を烏頭八瀉とせり。八瀉は安瀉の通字なるべし。

四八六 **阿漕** 阿濃・阿古貴・阿古木

シテ阿漕の海人。ワキ日向の者。所伊勢阿漕浦。

日向の者、阿漕が浦にて殺生禁斷の所に網を引きたる科により海に沈められし海人の靈に逢ふ。(觀、寶、剛、喜、)

備考「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿作とあり。「謠諸流名寄」に「金剛は阿古木」と見ゆ。金剛流にては阿古木と書きしものなり。又此曲のワキは其名乘には單に日向の者とあれど、待謠に弔をなす由作れるにより能にては常に僧ワキとするを例とせり。

四八七 **鹿の瀬**

シテ石積船船長の靈。ワキ大阪築港所長。ワキ運轉士。所播州沖鹿の瀬。時十  
二月。

鹿の瀬にて沈みし大阪築港の石積船の船員中、唯一人生き残りたる運轉士、築港所長  
を案内して沈没船員十一人の亡魂を弔ふ。(明治卅三年騰寫版刊本)

【備考】大阪築港に際し沈没したる石積船の船員の一週忌法樂に作られしもの。西村醉處  
案、平瀬春愛補、金剛直喜節附なり。後日其三週年に大西亮太郎訂正して觀世流とし  
能を演ぜし事あり。

### 第七 美人

#### 一 松風村雨

四八八 松風村雨

シテ海士少女松風の靈。ツレ同村雨の靈。ワキ旅僧。所攝津須磨浦。時秋。

旅僧須磨の浦にて松風村雨の舊跡を弔ひ、其亡靈に逢ふ。松風村雨は昔在原行平朝臣  
が須磨に流され居たる頃、其寵を受けし姉妹の海士少女なり。(五)

【備考】謡曲に關する大方の古書に曲名出づ。古くより松風とも松風村雨とも稱したりと  
見ゆ。「五音三曲集」に謡の一節を掲げ、「拾玉得花」に十體風姿の第三戀慕の例に舉  
ぐ。「五音曲條々」に「松風村雨の後段、班女、みそぎ川、是等は皆戀慕のもつばら也」  
と記し、「能作書」に「松風村雨、昔汐汲也」と記せり。演能の記事は「春日拜殿方諸  
日記」に寶徳四年四月十三日薪の猿樂に觀世太夫が演ぜしこと、「糺河原勸進猿樂記」  
に寛正五年四月七日同勸進猿樂の二日目に音阿彌が演ぜしこと、「親元日記」に寛正六  
年三月九日音阿彌が演ぜしこと等見ゆるが古きものなり。作者に就きては「世子六十  
以後申樂談儀」に世子の作とあるを採るべく、「二百十番謡目錄」に觀阿作とあるは誤  
と見ること至當なるべし。「能本作者註文」にも世阿作とあり。これと「能作書」の記事  
とを思ひ合すれば、昔汐汲といふ曲のありしを世阿が改作したるものなるべし。され  
ども「申樂談儀」に「さかゞみの能に云々水衣をたみて着し時、世に褒美せし也。それ

より殊の外はやりて、鹽汲などいふ能に着る。甚をかしき事也』と記し、他の所に松風とも松風村雨とも記せるに由れば此汐汲の能といふは松風とは別曲なる如くも思はれ、又粟田口猿樂記には永正二年四月十三日勸進猿樂(金春)の初日に汐汲を演じたことを記し、同勸進能の番組を通じて松風の曲無きに由れば或は同様の曲の如くも思はる。尤汐汲演能の事は粟田口勸進能の外に見當らず。後日の考證に譲るべし。

四八九 **【現在松風】**

シテ松風。ツレ村雨。ツレ在原行平。ワキ須磨長者。狂言行平従者。所攝津須磨浦。時秋。

行平朝臣須磨に流されて二年になりぬ。一夕舟を泛べて遊びたるが、折ふし來りたる二人の海士少女を見て心を寄せ、名を尋ねれば姉を藻鹽、妹を菊女といふ。後二女に松風村雨の名を與へ、假屋に近づけ或は酒に待せしめ或は舞を舞はしめて樂む。(元寫)

四九〇 **【夢想松風】**

シテ松風の靈。ツレ村雨の靈。ワキ阿波の道人一様。所攝津須磨浦。時中秋。一様、須磨の浦に中秋の月を眺め居たるに、時雨降り來りたれば二人の海士少女に宿を乞ふ。海士は即松風村雨の幽靈にて、夢に現れて昔を語り、悟道に入りたるを喜ぶ。(元寫)

二 源氏物語の女

四九一 **【碁】** 別名碁空蟬

シテ空蟬の靈。ツレ軒端の萩の靈。ワキ旅僧。所京三條京極。時秋。

空蟬、軒端の萩の靈、旅僧に昔語をなす。碁を以て全篇の綾とせり。(評、古觀外)

クセ 七八

四九三 [空蟬]

シテ空蟬の靈。ワキ旅僧。所京三條京極。時初秋。  
旅僧空蟬の靈に逢ひて跡を弔ふ(實、元)

【備考】能本作者註文に作者不明。

四九四 [半菀] 葉菀別名半菀夕顔・夕顔上

シテ夕顔の靈。ワキ雲林院の僧、所前山城雲林院。五條。時六月。

雲林院の僧、立花供養をなしたるに、夕顔の花を捧げし女あり。名を問へば五條のあたり夕顔の陰より來れりとして消え失す。僧怪みて五條に至り見るに、草の半菀より夕顔の靈現れ、源氏の君の昔を語る。(五)クセ

【備考】二百十番謡目録に内藤左衛門作とあり。「能本作者註文」には同様に記して作者の名の下に「後ニハ河内守ト云」と註せり。「言繼卿記」永祿三年正月の條に半菀夕顔の

曲名見ゆ。

四九四 [鶴林]

シテ夕顔の靈。ワキ僧。所京五條。

僧、五條にて夕顔の亡靈に逢ひ、鶴の林の謂、融の大臣の昔語、源氏物語のことどもを聞く。(元寫)

四九五 [夕顔] 別名源氏夕顔

シテ夕顔の靈。旅僧。所京五條。時秋。

旅僧都に上り、五條あたりにて夕顔の靈に逢ひ、讀經して成佛せしむ。(觀、實、剛、喜)

【備考】元文寫本の目録に源氏夕顔を半菀の一名の如く記せるは誤なり。「能本作者註文」に世阿作。「親元日記」に寛正六年二月廿八日演能(觀世)。



四九六 **【花供養】** 別名 紫上?

シテ紫の上の靈。ワキ嵯峨の僧。所京六條院の跡。時春。

僧、六條院の古跡なる花の下に眺め居たるに、紫の上の靈現れて昔の物語をなす。  
(元寫)

備考 ハナキヤウヤウと讀みたりと見え花香養又は花孝養の文字を當てたるがあり。

四九七 **【葵上】**

シテ六條御息所生靈。ツレ巫女。ワキ横川の小型。ツレ大臣。所京。

横川の小型、光源氏の北の方葵の上に憑きたる六條御息所の生靈を祈り伏す。(五)

備考 「能作書」「禪鳳習道目錄」等に曲名見ゆ。「能本作者註文」「二百十番謡目錄」に禪竹作とあり。「粟田口猿樂記」に永正二年四月十六日演能のこと見ゆ。

四九八 **【野宮】** 野の宮・野々宮

シテ六條御息所の靈。ワキ旅僧。所山城野の宮の舊跡。時晚秋。

六條の御息所の靈、旅僧に源氏の君と契りし昔語をなす。(五)

備考 「禪鳳習道目錄」に曲名出づ。「能本作者註文」及「二百十番謡目錄」に世阿作とあり。「親元日記」に寛正六年二月廿八日觀世が野々宮を演ぜしこと見ゆ。

四九九 **【檜天狗】** 原

シテ六條御息所の靈。ツレ天狗。ワキ熊野の山伏。所山城愛宕山。時冬。

山伏、愛宕山檜が原にて、魔道に墮したる六條御息所が天狗に責めらるゝ様を目のあたり見る。(貞、明和、元寫)

備考 「糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月十日(勸進猿樂三日目)音阿彌が檜原を勤めしこと見え、「親元日記」に文明十五年三月十二日檜天狗演能のこと見ゆ。又「能本作者

註文」に櫻天狗と櫻原とを別曲の如く記し、何れも作者不明とせり。

五〇〇 須磨源氏 須麻源氏

シテ光源氏の君の靈。ワキ藤原興範。所攝津須磨浦。時春。  
藤原興範都に上る途次、須磨の浦にて光源氏の靈に逢ひ、其昔語を聞く。(觀、實、剛、喜) 七九。

備考「元文寫本」には興範都に上る途としたれど今本は皆伊勢に參る途とせり「能本作者註文」に世阿作。

五〇一 明石上

シテ明石上の靈。ワキ旅僧。所播磨明石。  
旅僧明石の浦にて明石の上の靈に逢ひ其跡を弔ふ。(元寫)

五〇二 住吉詣

シテ明石上。ツレ侍女。ツレ源氏の君。ツレ惟光。ツレ從者數人。子方童隨身二人。ワキ住吉神主菊園何某。所攝津住吉。時秋。

源氏の君久しく須磨明石にありしが、厄解けて都に歸り、内大臣となりて世にいでし時、住吉明神に願果しの爲詣でたるに、折から同じく住吉に詣でし明石の上の舟に逢ひ、歌よみ交はせしことを作る。(觀、實、剛、喜)

備考類曲濔標あり。

五〇三 濔標

シテ明石上。ツレ侍女。子方源氏の君。ワキ惟光。所攝津住吉。

源氏の君久しく須磨明石にありしが、此の程都に上り、かねて祈りし願果しのため住吉明神に詣づ。打から明石の上も住吉に詣でんと舟を寄せたるに廻り逢ひ、互に歌よ

み交す。(元寫)

備考類曲住吉詣とは同じ事を作りたる別曲なり。

五〇四 玉 葛 玉鬘

シテ玉葛の内侍の靈。ワキ旅僧。所大和初瀬。時秋。

玉葛の内侍の靈、旅僧に昔の物語をなし、弔を受けて成佛す。(五)

備考「禪風習道目錄」に曲名見ゆ。「能本作者註文」二百十番謠目錄に禪竹作。

五〇五 柏 木

シテ柏木右衛門の督の靈。ツレ女三の宮の靈。ワキ旅僧。所武藏柏木。時春。

旅僧、柏木の里に柏木右衛門の督の遺愛なりし櫻を見に行きて、右衛門の督、女三の宮、二人の亡靈に逢ひ、之を弔ふ。(新)

備考類曲右衛門櫻あり。

五〇六 右衛門櫻

シテ女三の宮。ワキ旅僧。所武藏柏木。時春。

旅僧、柏木の里に柏木右衛門の督が遺愛の櫻花を見に行きて、彼の柏木と契りし女三の宮の靈に逢ふ。(元寫)

備考類曲柏木あり。

五〇七 落 葉 (甲) 別名 落葉宮・京落葉

シテ落葉の宮の靈。ワキ旅僧。所山城小野。時十月。

旅僧小野の里にて落葉の宮の靈にあひ、夕霧の大將と契りし昔語を聞く。(明曆外)

備考「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿作とあり。又「言繼卿記」天文廿三年七月四日の條、謠本貸借の記事の曲名中に落葉宮あり。當時廣く謠はれしものと見ゆ。

現今の喜多流にて謠へる落葉(は)は陀羅尼落葉の一名にして此曲とは別なり。此一名を京落葉といふことは名寄に従ひたれど、此名或はたらに落葉の誤讀なるやも知るべからず。

五〇八だ 陀羅尼落葉だらかは

別名落葉(は)

シテ雲井の雁の靈。ワキ旅僧。所山城小野。時秋。

夕霧の大将の北の方雲井の雁の妬心永く小野に残り居て、其靈魂旅僧に昔語をなす。

(貞、寶、喜) ワセ 三八七

備考喜多流のみにては此曲を落葉といへども、落葉(は)とは別曲なり。又名寄に陀羅尼落、陀羅尼伊行とあるは共に此曲名の誤傳なり。

五〇九あけ 總角あけ

シテ總角の大君の靈。ワキ旅僧。所山城宇治。

旅僧總角大君の靈に逢ひて之を弔ふ。(貞、元寫) ワセ 三八六

備考いろは名寄には上總とかきたり。

五一〇うき 浮舟うきふね

浮船別名宇治浮舟

シテ浮舟の君の靈。ワキ旅僧。所山城宇治。

旅僧宇治の里にて浮舟の君の靈に逢ふ。(觀、寶、剛、喜)

備考「能作書」の女體の能姿を書きたる中に「夕顔の上のものへけにとられ、浮舟のつきものなどとして、見風の方よりある幽花種、あひ難き風得也。古歌云、梅が香を櫻の花ににほはせて柳か枝に咲かせんより、猶あり難き花種なるべし。然ればかやうの風に相應したらん藝人をや無上妙感の達人とも申べき」と見えたり。「世子六十以後申樂談儀」には「浮舟の能、「この浮舟ぞよるべしられぬ」と云所肝要也。そこをば、一日二日にもしはつるやうに、ねぢつけて納むべし」と見ゆ。其他「歌舞髓腦記」「禪風習道目錄」にも記録あり。作者に就きては「談儀」に「これはしろふと横尾光久といふ人の

作、節は世子つく」とあり。又「能本作者註文」には細川弘源寺殿（吉田博士註、細川持之廟號弘源寺）御作とし、「二百十番謡目録」には與江元久作とせり。與江元久は横尾光久の傳へ誤りなるべし。「春日拜殿方諸日記」に寶徳四年二月十日薪の申樂に金春太夫が宇治浮舟を勤めしこと見ゆ。

五二二シ〔木靈浮舟〕 樹神浮舟・木玉浮舟・見玉浮舟別名木魂（木玉・見玉）

シテ浮舟の君の靈。ツレ靈の侍女少將。ワキ僧。所山城小野。

小野に庵を結び禁足し居たる僧のもとに、浮舟の君の靈毎日妻木を持ちて來りしが、或時其名を問はれて昔の物語をなす。（元寫）

備考 シテの詞に「こだまにもあらず魑魅にもあらず云々」とあるをとりて名づけしと思はる。「能本作者註文」に見玉を彌次郎の作とし、木玉浮舟を内藤藤左衛門（原註、後ニハ河内守ト云）の作とし、別曲の如く記せり。

三 在中將と契りし女

五二二シ〔井筒〕 別名井筒女

シテ紀有常の女の靈。ワキ旅僧。所大和在原寺。時秋。

旅僧在原寺にて業平と契りし有常の娘の幽靈に逢ふ。（五）

備考 世子六十以後申樂談儀「歌舞髓腦記」等に曲名見え、「五音三曲集」に謡の一節出づ。「能本作者註文」及「二百十番謡目録」に世阿作。

五二三シ〔高安〕 別名高安女

シテ高安の女の靈。ワキ都の者。所河内高安。時秋。

都の者高安の里に下りたるに、笛吹松のほとりにて伊勢物語中の高安の女の靈に逢ふ。（貞、元寫）クセ高安（一に高安通）九一

備考 流布本花傳書に曲名見ゆ。又高安廻といふは此曲舞の別稱なる由「元文寫本」に見えたれども、恐らくは高安通の誤ならん。「春日拜殿方諸日記」に寶徳四年二月十二

日薪の猿樂に金剛太夫が高安女を勤めしこと出づ。

五二四 **江藻髮**

シテ在中將と契りし老女。ワキ旅僧。所武藏武藏野。時秋。  
旅僧武藏野にて業平と契りし老女の靈に逢ひ、弔ひて成佛せしむ。伊勢物語の「もゝとせに」とせ足らぬつくも髮云々の類を一條の基として作れり。(新)

五二五 **濡衣**

シテ染川の女の靈。ワキ旅僧。所筑前染川。時秋。  
業平と歌よみ交はし、染川の女(平忠文の女)の靈、旅僧にありし昔を物語る。濡衣の名は女の返歌によれり。(元、元寫)フセ

四 小督局

五二六 **小督** **別名** 仲國

シテ源仲國。ツレ小督局。ツレ局侍女。ワキ大臣。所山城嵯峨野。時中秋。  
仲國中秋の夜高倉院の仰を蒙りて、嵯峨野に小督局の隱家を尋ね、宣旨を傳ふ。(五) **備考**「禪風習通目錄」に曲名見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に禪竹作とあり。

五二七 **清閑寺**

シテ小督局の靈。ワキ叡山の僧。所山城清閑寺。時秋。  
僧清閑寺のほとりに詠め居たるに、高倉院の寵を受けし小督局の靈現れ、昔語をなす。(元寫、評)

五 祇王と佛

五二八 **籠祇王**

シテ白拍子祇王。ツレ祇王從者。ツレ祇王の父。ワキ粉川の何某。狂言何某從者。所紀伊粉川。時春。

祇王の父、哀なる罪人を密に逃したる罪により、粉川に籠者せらる。祇王聞きて都より下り、共に觀音に祈誓を籠め、其利益にて刑を免る。(評、喜)

五二六 **祇王** 妓王 **別名** 二人祇王

シテ佛御前。ツレ祇王。ワキ瀬尾太郎。所京六波羅。

祇王、清盛に寵せられ居たるに、加賀の國より佛といふ白拍子推參し、祇王の情にて見參を許されしが、舞の巧さに反て清盛の寵を奪はる。(明曆外、寶、剛) **備考** 名寄に二人白拍子とあるは此曲の別名なるべし。「能本作者註文」に作者不明。

五二〇 **佛原** **別名** 佛御前

シテ佛御前の靈。ワキ都の僧。所加賀佛の原。時秋。

佛御前の靈、旅僧にありし世を語りて讀經を乞ひ、昔の姿を現して舞を舞ふ。(觀、寶、剛、喜)

**備考** 春日拜殿方諸日記に寶徳四年四月十三日の薪の猿樂に觀世太夫が演ぜしこと見ゆ。「能本作者註文」及「二番十番謠目錄」に世阿作。

六 雜

五二二 **松浦鏡** **別名** 松浦姫・佐用姫(小夜姫)

シテ佐用姫の靈。ツレ狹手彦の靈。ワキ旅僧。所肥前松浦。時冬。

旅僧松浦瀧にて佐用姫の靈にあひ、領巾振山(れいさん山)のこと、又鏡の宮のことなど聞き、教のまゝに一夜を此所に伏して、重ねて狹手彦の靈に逢ひ、神鏡を目のあた

り拜す。(元寫、評)クセ九四

備考「能本作者註文」「二百十番謡目録」に世阿作とあり。「言繼卿記」天文廿三年七月廿九日の條、音曲(謡曲)の本貸借のこと見えたる中に此曲名あり。當時況く謡はれしものと見ゆ。

五二三 采女ウメメ

シテ采女の靈。ワキ旅僧。所大和猿澤池。時春。

奈良の帝の寵を受けたる采女、後漸く寵の枯れたるを怨み參らせ、猿澤の池に身を投じたるが、其妄執長く猿澤の池に残り居て、亡靈旅僧に昔を語る。(五)クセ七八五飛火七八五 備考「世子六十以後申樂談儀」の後人の記入と見ゆる中に、永正十一年十月二十八日南都雨喜びの能に猿澤を演じたること見ゆ。猿澤とは今の采女なるべし。「禪風習道目録」には采女とあり。「能本作者註文」及「二百十番謡目録」に世阿作。

五二三 粟津采女アハツウメメ

シテ采女の靈。前ツレ靈の侍女。ワキ旅僧。所近江粟津原。

天の帝の崩御に殉じて粟津の原に葬られし采女の靈、旅僧に昔の物語をなす。(元、元寫)

五二四 求塚モトツカ 別名若菜・處女塚わか菜・むすめツカ

シテ菟名目處女の靈。ツレ菜摘女。ワキ旅僧。所攝津生田。時春。

昔津の國にうない少女といふ者あり。二人の男に戀ひせられ、何れにも身を許しかねて、生田川に投じたること大和物語に見ゆ。その女の靈、旅僧に昔を語り、死後の妄執の苦患を訴ふ。(元、寶、喜)

備考「歌舞髓腦記」に曲名見え、「世子六十以後申樂談儀」に謡の一節出づ。「能本作者註文」に世阿作とあり、「二百十番謡目録」に觀阿作とあり。



五二五 **〔玉水〕** 玉水 **別名** 井出玉水・下帶

シテ橘清友と契りし女の靈。ワキ旅僧。所山城井出の里。時春。

旅僧井出の玉水の邊にて水汲女の靈に行き逢ひ、橘清友と契りし昔の井出の下帶の物語を聞き、跡を弔ひて成佛せしむ。(元寫)

**備考**「看聞日記」に永享四年三月十四日仙洞にて井出玉水を演ぜしこと見ゆ。「能本作者註文」に世阿作。

五二六 **〔鵲の草莖〕**

シテ女の靈。ワキ旅僧。所和泉鵲野。時秋。

旅僧都にありしが、須磨浦に行かんとて鵲野を過ぎ、途に古塚を弔ふ。塚は昔橘公頼とかごとばかりに語らひし女の、便を待ちわびて空しくなりし名残なり。公頼もかの女を哀みて續いて桂川に身を投げしなり。彼の女の靈現れて此昔語をなし、弔を受け

て成佛す。(元寫)

五二七 **〔有子内侍〕**

シテ有子内侍の靈。ワキ旅僧(佐藤兵衛近宗)。所安藝。

徳大寺大納言實定卿の臣近宗、實定卿の歿後剃髮して修行に出でたるに、昔實定卿を戀ひ、入水して空しくなりし有子内侍の靈に逢ふ。(新)

五二八 **〔往生院〕** **別名** 勾當内侍

シテ勾當内侍。ワキ旅僧。所山城嵯峨。時秋。

旅僧嵯峨野にて勾當内侍の靈に逢ひ、續經して成佛せしむ。(評)

五二九 **〔小栗〕** **別名** 照姫

シテ遊女照姫。ツレ小栗小次郎助重。ワキ盜賊横山。ツレ横山郎黨。所相模。

小栗小次郎相模の國に宿りたるに、惡黨横山一味、夜討がけに財物を奪はんとて、數多の白拍子を連れ來りて酒を勸む。白拍子の中に小栗と契りし照姫といふがあり、盜人の計を小栗に告げ共に遁れ出づ。(元寫)

五三〇 〔狭衣〕 佐衣・小衣

シテ女二の宮の靈。ワキ朝臣。所山城嵯峨の院。時秋。

朝臣嵯峨野にて狭衣物語中の女二の宮の靈に逢ふ。(貞、元寫)

備考 吉田博士の説に由るに、一條兼良が今春禪竹の爲に作り與へし狭衣の曲ある處なれども應仁の亂の混雜に紛失したるもの、如く、又此より後右大臣實隆が同じく狭衣の曲を作りたること其日記に見えなれば、現存の狭衣は實隆作のものなるべしとなり。「桃華老人申樂後證記」に三條西内府新作として其全文を擧げ、「能本作者註文」に三條西殿御作とあり。此三條西内府とは實隆のことにして、實隆は天文六年八十三歳にて薨じたる人なり。

五三一 〔薄雪〕

シテ薄雪の靈。ワキ旅僧。所京鶴の林。時秋。

旅僧鳥邊山のほとりにて薄雪の靈に逢ひ、續經して後生を助く。薄雪は一條御所に仕へて深草の里なりし園部右衛門と契りし女なり。(新)

五三二 〔鶯宿梅〕

シテ息女。ワキ南領に仕ふる者。時春。

鶯宿梅と名つくる琴を失ひて垂れこめ居たる娘、花を見て心を慰む。(元寫、新)

五三三 〔昭君〕 別名 玉昭君

前シテ白桃(昭君の父)。前ツレ玉母(昭君の母)。後シテ單子の靈。後ツレ玉昭君

の靈。ワキ里人。所唐土かうほの里。時春。

王昭君胡國に至りたる後、形見の柳の枯れたるを見て父母其死を知り、悲みて其面影を見んとし、故事に慣ひて鏡を立つ。昭君の靈、單子の靈と共に現る。(五)

【備考】世子六十以後申樂談儀「禪鳳習道目錄」等に出づ。「歌舞髓腦記」には王昭君とあり。「能本作者註文」に世阿作と見ゆ。「粟田口猿樂記」に永正二年四月十四日其勸進猿樂の二日目に演ぜられしこと見え、「申樂談儀」の後人の入筆と見ゆる中に永正十一年十月廿八日南都雨喜びの能(當日十七番)に演ぜられしこと見ゆ。

五三四 楊貴妃

シテ楊貴妃の靈。ワキ方士。所仙境蓬萊宮。時秋。

玄宗皇帝の方士、敕によりて楊貴妃の魂魄を尋ね歩き、遂に蓬萊宮に至りて其靈に遇ふ。(五)

【備考】能本作者註文「善竹作として『作者有説』と註す。「二百十番謠目錄」にも禪竹

作とあり。

第八 社寺神佛

一 山城

五三五 輪藏

シテ傳大士、ツレ火天。子方普建。子方普成。ワキ筑前宰府居住の僧。所京北野社。

宰府の僧北野に輪藏を拜し、法徳によりて様々の奇特を見、又五千餘卷の經文を披見す。(觀、寶、喜)

【備考】能本作者註文「及二百十番謠目錄」に彌次郎作とあり。又同じ事を作る別曲北野は他の流儀にて此曲を改作したるものなるべし。同文の所多し。

五三六 北野

シテ水天。ツレ傳大士。子方普賢(普建の誤)。子方普聞(普成の誤)。ワキ筑紫方の僧。所京北野社。

筑紫の僧北野の輪藏を拜し、法徳によりて様々の奇特を見、又五千餘卷の經文を披見す。(新)

備考輪藏と全く同じ事を作りたるものにて同文の所多し。輪藏を改作したるものなるべし。役割を更へ文を甚しく約めたり。此方文や、拙し。

五三七 右近 別名右近の馬場

シテ北野の神(前は化身の女)。前ツレ神の化身侍女。ワキ鹿島の神職。所山城北野社。時春。

鹿島の神職、北野右近の馬場の花盛に、北野の神の奇特を見る。(觀、寶)

備考「五音曲條々」に「ひをりせし右近の馬場の木の間より」のうたひのかゝり、是皆幽曲也。凡應永年内より以來のうたひ物、節曲舞など、皆々幽曲なり」と見え、「世子六十以後申樂談儀」に「右近の馬場の能まつことあれ(今は「り」に謠ふ)や有明の」、かやうの所、次第くによすべし」、又「右近の馬場の能」はなくなるま、「ま」にてながひる。「ま」大事の字也」など見ゆ。禪竹の「五音次第」には謠の一節を引けり。「異本糺河原勸進猿樂記」に寛正五年四月七日其二日目に演じたること(流布本に春近)見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謡目錄」に世阿作。

五三八 妙顯寺

シテ日蓮上人の靈。ツレ天童子二人。ワキ鎌倉の僧。所京妙顯寺。時十月十三日。

僧妙顯寺に參りたるに、偶々祖師日蓮上人の忌日に當り奇特を拜す。(新)

五三九 ろくかくだう 【六角堂】

シテ聖徳太子の靈。ワキ僧。所京六角堂。時春。

初發心の僧、六角堂に參詣し、聖徳太子の靈に逢ひ、法語を聞き又奇特を見る。(正)

五四〇 れんげどうじ 【蓮華童子】 別名真如堂

シテ蓮華童子(前は寺邊の者)。ワキ旅僧。所京真如堂。時十月十夜の頃。

旅僧都に上り十夜念佛の比真如堂に參りたるに、蓮華童子の化現戒算上人開山の昔を語り、又奇特を示す。(元寫)

備考類曲慈覺あり。

五四一 じかく 【慈覺】 別名慈覺大師

シテ慈覺大師の靈。ワキ鎌倉の僧。所京真如堂。時十月十五日。

鎌倉の僧都に上り真如堂に至りたるに、偶々十夜念佛の時に當り、慈覺大師の靈に逢ひ十夜の由來を聞く。(正)

備考類曲蓮華童子あり。

五四二 せん 【祇園】

前シテ武塔天神。後ツレ飛亂破の鬼神。ワキ蘇民將來。所九相國に至る途。時前春。後六月十五日。

山城祇園天王社の武塔天神、或春九相國に至らんとせし時、蘇民將來が一宿の情に感じ、次の六月に六月祓をなすべきことを教へ、奇特を現じて惡疫を拂ふ。(正)

備考「松尾氏名寄」に武塔天神とあるは此曲の假名なるべく、「千四百番名寄」に祇園沙汰と同曲なる由見えたるは信じ難し。沙汰の語此曲に似合はしからず。

五四三 さいこくめぐる 【西國廻】

シテ田村麿の靈。ツレ花山法皇。ワキ山科の律師。所山城清水寺。

花山法皇弘徽殿女御の御別を悲み給ひ、山科律師を従へ、三十三所の佛蹟を廻らんとてまづ洛東清水寺に參籠あるに、田村麿の靈現れて慰め奉り、君の巡禮御修行を守らんとて舞樂をなす。(元寫)

備考此曲三十三所めぐりのクセの一條あり。各種名寄に三十三間の曲名あるは此クセを三十三所と名づけしもの、誤傳などにや。

五四四 補陀落山

シテ觀世音。ワキ鷹匠二位中將。所攝津兵庫より補陀山まで。時春。

關白鷹匠左大臣の長男二位中將、三條京極の姫に心を寄せ居たるを、まゝしき母の計にて彼の姫行方を失ふ。中將その行方を尋ねんと清水寺に一七日參籠して祈念したるに、筑紫に下るべき由靈夢あり。即ち途に上りたるに、途に觀音の化身に逢ひ、淨土に導かれて補陀落山を見る。(觀世古寫本)

五四五 御菩薩池

シテ地藏菩薩の化現。ワキ高野の僧。所山城賀茂。時秋。

僧、六地藏詣をせんとて賀茂に至り、地藏菩薩の化現に逢ひて奇特を拜む。(元寫)

五四六 賀茂

シテ別雷神(前は女姿)。前ツレ神女。ワキ室明神の神職。所山城、賀茂。時初夏。

室の神主賀茂明神に詣で、奇特に逢ふ。(五)

備考世子六十以後申樂談儀の後人の記入と見ゆる條に、永正十一年十月廿八日南都兩喜びの能に矢立鴨を演ぜしこと見ゆ。「能本作者註文」に善竹作とし「但奥ハ寶生木夫作」と註す。「二百十番謡目錄」にも善竹作。

五四七 毘沙門

シテ多聞天。後ツレ天女。ワキ下京邊の者。所山城鞍馬山。時春。

下京邊の者信心の功德により、鞍馬山の毘沙門に詣でて奇特に逢ひ、又現世の貧苦をのがる。(元寫)

五四八 **伏見** 伏見 **見** 見 **別名翁草(乙)**

シテ伏見の翁の神靈。前ツレ神靈。ワキ藤原俊家。ツレ從者。所山城伏見。時秋。

俊家伏見の社に詣で、昔伏見の宮造に一首の歌を詠じたる伏見の翁の神靈に逢ふ。(貞、元寫、寶)

**備考**「流布本花傳書」の舞の圖の中に此曲名見ゆ。「言繼卿記」永祿十三年八月十八日の條、日吉太夫演能五番の中に此曲あり。

五四九 **夜須良爲**

前シテ神職。後シテ今宮の神。ワキ東國方の者。所山城今宮社。時四月十日。

山城紫野今宮神社に毎年四月十日(昔は彌生十日)やすらる祭として疫病を拂ふ祭事あり。此日東國の者此祭に參りて奇特を拜す。(明治卅一年今宮神社刊本)

**備考**作文佐々木樗一郎、節附金剛直喜。

五五〇 **朝日天神**

前シテ佐々木の神靈。後シテ白太夫の神。ワキ菱江の庄司。所山城壬生のほとり。時初春。

菱江某伊勢參宮の歸途、白米太夫の館にて靈夢を蒙り、壬生のほとりなる佐々木觀音堂の朝日天滿宮に詣で、佐々木高綱の靈、白太夫の神の奇特を見る。(元寫)

五五一 **松尾**

シテ松尾の神。前ツレ前シテの從者。ワキ朝臣。所山城松尾。時秋。

官人松尾社に参りて奇特を見る。(明曆外、明和、寶)

【備考】「親元日記」に文明十五年三月十二日演能のこと見ゆ。「能本作者註文」に世阿作。「二百十番謠目錄」には觀阿作。

五五二 龍頭太夫 別名 稻荷

前シテ山神龍頭太夫の化身(老人)。前ツレ神靈(老嫗)。後シテ雷の神。ワキ官人。所山城伏見。時秋。

前官人伏見稻荷社に参詣して、山神の化身より當社の縁起、弘法眞蹟の鳥居の額の來歴を聞く。雷神忽ち降りて彼の額面を奪はんとすると、社壇の中より不動現れて奪ひ返し、其雷神を降伏す。(貞、新、元寫)

五五三 放生川 別名 八幡放生會・放生會・八幡(甲)

シテ武内の神。前ツレ神の化身(從者)。ワキ鹿島の神職。所山城男山。時八月。

男山石清水八幡に放生會と稱へて毎年八月數多の魚を社前の川に放つ神事あり。此曲は鹿島の神職此神事に参り逢ひて神靈の奇特を見し事を作れり。(五)

【備考】此曲今は各流とも放生川と稱すれども、昔は八幡とも、八幡放生會とも放生會とも云ひしと見え、古書には種々に書けり。放生川の名は「毛端私珍抄」に見え、「能本作者註文」「二百十番謠目錄」とも世阿彌作として放生川の名を擧ぐ。「五音三曲集」には謠の一節を引きたれども曲名を擧げず。「能作書」には八幡と記し「如此老僧云々」と記せり。此老體の語により此に云へる八幡が次項の八幡(乙)に非ること明なり。又「世子六十以後申樂談儀」には世子の作として八幡を擧げたり。又同書に放生會の名の下に「魚放つ所、曲なれば私あり」と記し、又「近頃、八幡放生會の能に「秋きぬとや」と云ひしを、殊皆時の興にもてはやされし、時節によりて、覺えず「や」と云こゑ也」と記せり。又同書に永享元年三月たききの神事に觀世太夫(原註、元雅)が八幡放生會を演ぜしこと見え、「春日拜殿方諸日記」に寶徳四年二月十二日の薪の申樂に金剛太夫が放生川を演ぜしこと見ゆ。



五五四 **八幡** (乙)

シテ八幡。ツレ新羅の大將榮芳。ワキ官人。所前山城男山。後新羅の海。時春。

前朝臣男山八幡に詣でたるに、八幡宮、童子の姿に現じ、新羅國王日本の神々を水坪に封じこめて攻め來るべきにより、大仁王經會を修すべしと神敕を下す。後新羅の水師日本に攻め來らんとする海上にて、八幡を始め日本の神々之を攻め亡す。(貞、元寫)

備考「世子六十以後申樂談儀」に世子の作なる由見えたる八幡は此曲に非るべし。

五五五 **弓八幡** 弓矢八幡

シテ高良明神(武内の神)。前ツレ神靈(從)。ワキ官人。ツレ同。所山城男山。時二月。

後宇多の院の臣下、敕諭により男山八幡に參詣して高良明神の奇特を見る。前シテ參

詣人に雜り弓を持ち出て來り、八幡の弓矢の謂を語るに由り此名あり。(五)

備考「世子六十以後申樂談儀」毛端私珍抄」等に出づ。「二百十番謠目錄」に世阿作とあり。

五五六 **八幡弓**

前シテ武内の神の化身。前ツレ玉垂の命の化身。後シテ高良の神(武内玉垂二神合一)。ワキ奈良の臣下。ツレ同。所前大和奈良。後山城男山。

奈良の帝の時、諸國よりの調物の中に、山城より弓矢を奉りたる二人の男、弓矢の謂を語り、我は石清水なりとて二羽の鳩となつて八幡に飛び歸る。帝即ち男山に御幸ありしに、八幡の神現れて御代を祝ふ。(元寫、正)

備考元文寫本は後シテを武内の神とし、正徳刊本には玉垂武内二神を同體となせり。

二 大和

五五七 [逆矛] 逆鉾

シテ瀧祭の神。前ツレ神靈(從)。後ツレ天女。ワキ官人。所大和龍田社。時神無月。

朝臣、逆矛を納めたる龍田の社に詣で、奇特に逢ふ。(元寫、元、觀)

備考「看聞日記」に永享四年三月十五日仙洞にて演能のこと見ゆ。「能本作者註文」に世阿作。「二百十番謡目録」に宮増作。

五五八 [龍田] 立田別名龍田姫(立田姫)

シテ龍田姫。ワキ旅僧。所大和龍田山。時十一月。

旅僧龍田の明神に參らんとして龍田姫の奇特を見る。(五)

備考名寄に龍田紅葉とあるは此一名なるべし。又「流布本花傳書」に立田姫の曲名見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謡目録」に善竹作。

五五九 [當麻] 當摩

シテ中將姫の精靈。前ツレ化女。ワキ旅僧。所大和當麻。

中將姫の靈旅僧に當麻寺曼陀羅の由來を語る。(五)

備考中將姫の幼時の事を作る曲に雲雀山あり。「粟田口猿樂記」に中將姫と見ゆるは此曲又は雲雀山の別名なるべし。又名寄に二上とあるは此一名にや。文中二上山の事あり。「親元日記」に文明十五年三月十二日演能のこと見ゆ。「能本作者註文」及「二百十番謡目録」に世阿作。

五六〇 [代主] 自主別名葛城加茂(葛城鴨)

シテ事代主神。前ツレ神靈(從)。ワキ都賀茂神職。所大和葛城山。時四月。

京の賀茂の神職、葛城賀茂の明神に詣で、奇特を見る。(貞、元寫、觀)

備考「能本作者註文」に自主を、「二百十番謡目録」に葛城鴨を、共に世阿彌の作と記せ

り。

五六二【一言主】

シテ一言主の神。ワキ山伏。所大和葛城山。時春。

山伏葛城山に登りて、一言主の神に遇ひ、狩獵の物語を聞く。雄略天皇御狩の時、如何なる者ぞと名を問はれ、此山の主なりと唯一言答へたりといふ事に由りて作れり。(正、元寫)

五六三【葛城】 別名雪葛城・大峯葛城

シテ葛城の神(言主—女體に作る)。ワキ羽黒山の山伏。所大和葛城山。時冬。

葛城の神(女體)役の小角の呪咀にあひて猶三熱の苦絶えざるを嘆き、山伏に加持を乞ふ。(五)

備考 世子六十以後申樂談儀の後人の加筆と見ゆる中に永正十一年南都雨喜びの能に

演ぜられしこと見え、曲名をカツラギと記して肩に細字にてユイレイと註せり。俗に幽霊葛城とも稱したりと見ゆ。「又親元日記」に寛正六年二月廿八日觀世が演ぜしこと出づ。「能本作者註文」「二百十番謠目錄」共に世阿作。

五六三【三輪】 別名三輪小手卷(三輪緒環)

シテ三輪の神(女體)。ワキ玄寶僧都。所大和三輪。時秋。

玄寶三輪に山居せし時、毎日檜關伽の水を持ち來りし女人の乞ひに任せて衣一重を與へしに、己の栖處は二本の杉のほとりなりと云ひて去る。僧都二本の杉に至り見るに、彼の衣に神詠一首書かれありて、やがて三輪の神現れ、神道を物語る。昔女のもとに通ひ來りし男あり、名も知らず所も知らざりしかば、女其男の在所をしらんとて密に緒環に針をつけ、之を男の衣に刺し、糸を手繰りて其行きたる方を尋ねたるに、其糸此二本の杉に止まり居たりと云ふ事を曲の綾とせり。同じやうなることを作りし小手卷の曲あるにより之が別名を三輪小手卷と云ふ。(五)

【備考】親元日記に寛正六年三月九日觀世が演ぜしこと見ゆ。「能本作者註文」「二百十番謡目録」に世阿作とあり。又名寄に二本杉といふ曲名あるは之が別名なるべし。

五六四 泊瀬詣はつせ まうで 初瀬詣別名初瀬はつせ(甲)

シテ菩薩の化現。ワキ遊行廿一代の聖。所大和泊瀬。時春。

上人泊瀬寺に詣で、奇特なる一軸を菩薩より授けらる。(元寫)

【備考】世子六十以後申樂談儀に「はつせの女さるがく」と記せるは此曲にあらず。

五六五 布留ぶる

シテ布留の神。ワキ彦山の行者。所大和布留の神宮(石上神社)。時十月。

彦山の行者布留の神宮に參り、法徳によりて靈神に逢ひ、布留の御衣の謂、又神體なる劍の謂を聞きえたることを作れり。(明和)

【備考】春日大宮若宮御祭禮圖の田樂の能のことを記せる中に「ふるごほり」といふ曲名

あり。或は此曲の全身にや。「世子六十以後申樂談儀」に「ふるの能に「ふる野にたてる三輪の神杉とよみしも其しるし」と云ふ所、「ふるのにたてる三輪の神」まで大事に云ひて、「其しるし見えて」とやすくかるくと謡ふべし、又「ふるの能にそら女(原文のまゝ)ぬのをあらう問答より、順路なれば、布留のけん(劍)のいはれをうたふべきをはつみ、「ゆきのふるのたかはし」とうたふこと、ゑんけんを本とする故也。もとさに名所のほしきは、かやらのゑんけんのたよりのため也。又其まゝいはれよりうたふ共、ふぜいに成べきもときならば、いはれをもうたひ出すべし。曲舞の序に「抑ふるとは」と云、「みつるき」など、いはれをうたへはつよき也。「はつ御ゆき」とうたひぬれば、やがて、ふるがいで來て能に成也」など記せり。此引文「明和本」と相違無し。「能本作者註文」「二百十番謡目録」共に世阿作と記せり。又名寄に見ゆる御衣は或は此曲の假稱かとも思はる。

三 攝津

五六六 じやうぐわうたいし **〔上宮太子〕**

前シテ秦河勝の靈。後シテ上宮太子の靈。後ツレ天女。ワキ朝臣。所攝津天王寺。

朝臣、天王寺に詣で、秦河勝と上宮太子との神靈に逢ひ、奇特を見る。(正、評) クセハ八九

備考「五音曲條々」に曲名見ゆ。類曲太子あり。

五六七 たいし **〔太子〕** 別名四天王寺

シテ聖徳太子の靈。ツレ釋迦如來。ワキ朝臣。所攝津天王寺。時春。

後醍醐天皇の臣下、四天王寺を再興すべき敕諭を受けて天王寺に至り、聖徳太子釋迦如來の奇特に逢ふ。(貞、元寫)

備考類曲上宮太子あり。

五六八 いは **〔岩船〕** 岩舟・巖舟 別名津守?

シテ天の探女(津守の神)、前は化神。ワキ敕使。所攝津住吉浦。

敕使住吉の濱に天の探女の奇特を見る。(五)

備考「飯尾宅御成記」に寛正七年二月廿五日音阿彌が演ぜしこと見え、「粟田口猿樂記」に永正二年四月十七日四日目の勸進申樂に演ぜられしこと見ゆ。觀世流現行のものは半能なり。

五六九 こ **〔小尉〕** じよう

シテ神靈、住吉の小尉。前ツレ神靈(從)。ワキ梅津何某。所前山城鳥羽渡。多攝津住吉。

當今に仕ふる梅津某、靈夢により住吉に行かんとする途次、鳥羽の渡にて住吉小尉の神靈の舟に便乗し、又住吉に至りて再び奇特を見る。(元寫)

備考別名を住吉小尉にいひしなるべし、今、住吉少將、住吉小侍の名を傳へたるは共に住吉小尉の誤と思はる。

五七〇 留林寺

シテ薬師如來。ツレ薬師化現の從者。ワキ醫師面白。所攝津住吉。時正月。

面白といふ醫師留林寺(津守の寺)に至り十二薬師の奇持に逢ふ。(元、元寫)

備考「元祿番外謠本」には時を「三月」としたれども文に合はず。「元文寫本」に「正月」とあるが當れり。

五七一 西宮(甲)

シテ蛭子の神。前ツレ神靈從者。後ツレ天女。同龍神。ワキ壬生中納言實方。所攝津西宮。

中納言實方西の宮に詣で、様々の奇特を見る。(元、元寫)

備考西宮(乙)と構想似たれども文全く異れり。又「千四百番名寄」に「西宮」と書きて「サイクウ」と傍訓せり。

五七二 西宮(乙)

シテ蛭子大明神。ツレ娑婆羅龍王。ワキ朝臣。所攝津西宮。

朝臣西の宮に参りて蛭子の神の奇特に逢ふ。(元寫)

備考西宮(甲)と構想似たれども文全く異れり。

五七三 劍珠

シテ蛭子の神靈。ワキ朝臣。所攝津西宮。時春。

朝臣西の宮に來りて奇特に逢ひ、劍珠といへる名珠を目のあたりに見る。(正、元寫)

五七四 惠美須祭

シテ蛭子の神。前ツレ蛭子化身の従。ワキ豊樂某。ツレ豊樂家人。所武藏。時正月廿日。

武藏の豊樂某、津の國西の宮の惠美須を信じ惠美須祭を行ふ所に、津の國より來りたりとて彼の蛭子の神現じたることを作る。(元寫)

四 近江

五七五 [歌藥師]

シテ藥師如來。子方比叡山の兒菊光。ワキ比叡山住僧。所近江比叡山。藥師如來の靈驗により兒の病全癒のこを作る。(正)

備考 菊光塵といふ曲名は或は此曲の別名なるべし。

五七六 [大黒] 別名 大黒天

シテ摩訶迦羅天(大黒天)。ワキ傳教大師。ツレ從僧。所近江比叡山。時秋。

延曆廿四年、傳教大師(未だ大師號無かりし時なるも謠には大師とせり)唐土より歸りて延曆寺を草創したる時、大黒天現れて永く守護たるべしと誓ふ。(正、元寫)

五七七 [泣不動] 鳴不動・啼不動

シテ金羯羅童子。ワキ三熊野客僧。所近江園城寺(三井寺)。時春。

客僧園城寺に參りたるに、泣不動の前なる金羯羅童子形を現じて泣不動の由來を語る。(元、元寫)

備考 「春日拜殿方諸日記」に寶徳四年二月十三日、薪の申樂に觀世太夫が演ぜしこと見え、「親元日記」に寛正六年三月九日音阿彌が演ぜしこと見ゆ。名寄に七不動とあるは此曲名假名書の誤傳なり。「能本作者註文」に世阿彌作とあり。

五七八 [三尾] 水尾

シテ水尾の神靈。後ツレ天女。ワキ法華修行の沙門。所近江水尾社。時秋。

旅僧水尾の社にて明神の神靈に逢ひ、水尾社の縁起を聞き、又龍神が燈明を捧ぐる奇特を見る。(正、元寫)

備考類曲水尾山には後段に龍神を出しこれは天女を出せり。

五七九 [水尾山]

シテ水尾の神靈。前ツレ神靈隨伴。後ツレ徳叉迦龍王。ワキ朝臣。所近江水尾山。時秋。

朝臣勅により水尾神社に詣で、明神の神靈に逢ひ、龍神が燈明を捧ぐる奇特を見る。(正、元寫)

備考類曲三尾には龍神の奇特を謠の上へのみ現して後ツレを天女とせり。

五八〇 [志賀] 別名大伴・黒主・志賀黒主

シテ大伴黒主の神靈。前ツレ黒主の靈隨伴。ワキ朝臣。所近江志賀。時春。

朝臣志賀にて黒主の神靈に逢ふ(觀、實、剛、喜)

備考古名黒主、「能作書」以下多く黒主とせり。「言繼卿記」弘治二年二月十二日の演能の條に黒主とあり。「運歩色葉集」には黒主と記して大伴と註せり。「能本作者註文」には黒主の作者を世阿彌とし、「二百十番謠目錄」には志賀の作者を世阿彌とせり。

五八一 [白髭] 白鬚

シテ白髭明神(前は化現)。前ツレ神靈隨伴。ワキ敕使。所近江白髭社。時春。

天皇の靈夢ありて敕使を白髭社にさへれたるに、明神出現して社の縁起を語り、又奇特を現し御代を祝ふ。(五)ク七一。

備考「五音曲條々」に出づ。「二百十番謠目錄」に觀阿作、「能本作者註文」に善竹作。

五八二 [日上] 飛賀見・飛が見

前シテ白髭明神。後シテ龍神。ワキ藤原景見。ツレ聖武天皇朝臣。狂言里人?。



所前 近江粟津。陸奥飛賀見川。時秋。

聖武天皇大佛に鑄させ、之が泥に用ゐる黄金を得んとて、金峯山の神敕により江州へ  
敕使を差立てらる。敕使粟津にて白髭の神靈に逢ひ、教へられて陸奥守景見の援を  
得、飛賀見川に至つて龍宮より貢調の金塊を得。(元寫)

備考「能本作者註文」に小次郎作となり。又同本吉田博士の註に「飛賀美は名寄に彼岸  
といふものか」とあるは如何あらん。

五八三 〔竹生島〕

シテ龍神。ツレ辨才天女。ワキ延喜臣下。所近江琵琶湖。時三月。

朝臣竹生島に詣で奇特に逢ふ。(五)

備考「二百十番謡目錄」に禪竹作、「能本作者註文」に作者不明。

五八四 〔菅田〕

シテ菅田の神(前は化現の女)。ワキ矢射子明神神職。所近江菅田宮。時晚秋。

越後矢射子の神主、菅田の明神に來りて奇特に逢ふ。(明治三十二年刊本)

備考刊本奥附に「右は觀世織部の代より久敷中絶し有りしを今回再興する者也」と記  
し、觀世清廉、大江又三郎(再興擔任)、竹村太左衛門、竹村猪八郎の名を列せり。

五八五 〔多賀〕(乙)

シテ犬上の神。前ツレ神靈の從。後ツレ天女。ワキ俊乗坊重源。所近江多賀社。

俊乗坊重源南都大佛再興の院旨を受け、靈夢に従ひ再興成就まで齡の延びんことを祈  
らんとため多賀社に詣でたるに、神靈現れて奇特を示す。(明治三十四年刊本)

備考此曲は多賀神官從八位大口珍瓏の作文にて、「いろは名寄」等に見えたる昔の多賀  
(甲)とは全く別なり。

五八六 〔日觸詣〕

シテ神靈。前ツレ神靈の從。ワキ宇佐八幡神官。所近江比牟禮八幡社。時春。宇佐八幡の神官、江州比牟禮八幡に詣で、奇特に逢ふ。八幡の傍にあはや、くれはの社あり。此曲に出る神靈があやはとくれははとりの昔を語るは、或は作者があやはとりの神靈として作れるものか。(明治卅二年觀世清康、訂正刊本)

五 伊勢

五八七 **〔鈿女〕** ウヂメ **別名玉椿** たまつばき

シテ天鈿女命。ワキ神主。ツレ神職。所伊勢一の宮椿大明神社内。時仲春。椿大明神の祭事の中、仲春椿の盛なる頃、若宮鈿女御前にて神樂を奏することあり。此日天鈿女命奇特を示せる事を作る。(正)

五八八 **〔内外詣〕** ウチとまうて

シテ大神宮神官。ツレ同。ワキ敕使。ツレ敕使隨行臣下。所伊勢大神宮。

敕使伊勢内外の宮に詣で神樂を奏せしむることを作る。(剛)

五八九 **〔宮川〕** みやがは

シテ手力雄神。前ツレ神靈隨伴。後ツレ鈿女命。ワキ眞名井原の神職。所伊勢山田。後天の岩戸。時五月三日。

丹後の神職伊勢に參詣して手力雄神に逢ひ、豊受の神事の來歴を聞き、又岩戸に詣りて目のあたり神代の昔の奇特を拜む。(元、元寫)

**備考**「能本作者註文」に作者不明。

五九〇 **〔繪馬〕** えま

シテ天照太神の神靈。ツレ度會の神。後ツレ天鈿女命。後ツレ手力雄命。ワキ左大臣公能。ツレ從者。所伊勢齋宮。時十二月三十日。

伊勢齋宮に十二月三十日の夜繪馬をかくる神事あり。此夜左大臣公能伊勢に參りて奇

特を見る。(觀、寶、剛、喜)

五九二 **〔金札〕**

シテ伊勢神宮の使天津太玉神。ワキ桓武天皇臣下。所山城伏見。

遷都の大宮造の爲伏見に下りたる朝臣、伊勢太神の御使なる神に逢ひ、天より金札の降り下る奇特を見る。(五)

【備考】五音三曲集及「五音次第」に謠出づ。「二百十番謠目錄」及「能本作者註文」に世阿作となり。現今觀世流に用ゐるものは半能にする爲謠を約めたるものなり。

五九三 **〔二見浦〕** 二見が浦別名二見

シテ樂人(神靈?)。ワキ荒木田の神職。所伊勢二見浦。時十月十五日。

荒木田の神職、熱海の神事を執り行ひ、船を飾り樂を奏す。(元)

【備考】「蔭涼軒日録」に寛正六年九月廿七日春日社祭禮に金剛が二見ノウラをつとめたり

と見ゆ。

五九四 **〔御裳濯〕**

御裳別名御裳濯川・石鏡・鏡御裳濯

シテ興玉の神。前ツレ神靈隨伴。ワキ朝臣。所伊勢の二見浦。時五月。

興玉の神御裳濯川に現れて官人に石の鏡の縁起を語り奇特を示し給ふ。(貞、元寫、明和、喜) 【七五九四】

【備考】「運歩色葉集」には曲名を御裳と記せり。「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に世阿彌作。

五九五 **〔不斷櫻〕**

シテ不斷櫻の精。ワキ敕使。所伊勢白子山。時春。

敕使、伊勢白子山觀音寺の花を見んため同所に下りたるに、不斷櫻の精縁起を語る。(貞、元寫) 【七五九三】



るが、此夜忍びて安珍の閨に来る。安珍驚きて詞巧に詐りて歸らしめ、夜に紛れ逃れ出で、日高寺に至り、寺僧に乞ひて鐘の中に身を隠す。白菊やがて之を知り、彼の跡を追はんとて終に一念の毒蛇となりて日高川を渡り、寺に來りて安珍が隠れたる鐘を七纏ひ纏ひ、終に鐘と共に安珍を焼き了んぬ。(新)

備考道成寺を現在物に作りなしたる曲なり。類曲に鐘巻、日高川あり。

五九八 かねまきだうじやうじ  
〔鐘巻〕 別名 鐘巻道成寺

シテまなご庄司の娘の靈(初白拍子、後惡龍)。ワキ道成寺住僧。ワキツレ從僧。ワキツレ若大衆。狂言能力。所紀伊日高。時春。

男を慕ひて毒蛇となりし女の惡念永く道成寺の鐘に残りて鐘再興の供養に祟をなす。類曲道成寺をや、長く引き延べて演能上の仕草を多くしたるものなり。(元)

備考「能本作者註文」に作者不明とあり。同書吉田博士の註に「鐘巻は道成寺の古名なり」とあるは如何あらん。類曲道成寺、現在道成寺、日高川あり。

五九九 だかがは  
〔日高川〕

シテまなご庄司の娘の靈。ワキ客僧。所紀伊日高川。

客僧熊野に參詣の途次、日高川を渡らんとするに、まなご庄司の娘の惡靈出で、此川を渡るべからずと止め、又夜に入りて毒蛇となりて現れたるも反て客僧に祈り伏せらる。(新百)

備考類曲に現在道成寺、道成寺、鐘巻あり。

七 淡路

六〇〇 いざな  
〔伊弉諾〕

シテ伊弉諾尊。ツレ伊弉冊尊。ワキ藤原鎌足。所淡路武島。

鎌足靈夢に従ひ淡路の武島に詣で、伊弉諾伊弉冊二神に逢ひ奉る。(元寫)クセ城。

六〇二 **〔淡路〕** 別名淡路島・樸葉（樸・踰鶴葉）

シテ伊弉諾尊。前ツレ男。ワキ朝臣。所淡路。

朝臣を藉りて淡路の神徳を説ける曲なり。（觀、春、剛）クセ六八六

**〔備考〕**五音三曲集に謡の一節出づ。「二百十番謡目録」に觀阿作。「能本作者註文」には作者不明。

八 讚岐

六〇三 **〔海士〕** 海人・白水郎（白水良）・登

シテ海人の女の靈（後、龍女）。子方房前大臣。ワキ大臣從者。ワキツレ同。所讚岐志度浦。時春。

藤原房前、傍臣の詞によりて其生母が志度浦の海人なることを知り、讚岐に下りて追善をなさんとするに、あまのゝ里の邊にて彼の海人の靈現れ、唐士より贈り來りたる

寶珠の龍宮にとられし時、房前を世に立つることに代へて、命を惜まず其珠を奪ひ返し、當時の物語をなし、追善をたのみて消え失す。房前やがで跡を弔ひ、志度寺をたて、長く供養をなす。志度寺の縁起とそれに關する口碑によりて作れりと見ゆ。（五）  
**〔備考〕**世子六十以後申樂談儀に「「あらかなつかしのあま人やと、御涙を流し玉へば、此「御なみだ」のふし金春がふし也。あまりにくだく敷ことをば、ながくかきのせず、同じのうに「ちの下をかい切、玉をおしこめ」などのかゝりは、黒がしらにてかるがるといで立て、こはたらきの風體也。女などに似合はず」など見ゆ。「禪風習道目録」に曲名出づ。「二百十番謡目録」には世阿作とあり。「能本作者註文」には世阿作として掲げたれど「是は別作と云説あり」と割註せり。前掲「談儀」の記事と、又同書に他の記録なきを思ひ合すれば別作と見ること至當なるべきか。「粟田口猿樂記」に永正二年四月十六日勸進申樂（今春）の第三日目に演ぜられしこと見ゆ。

六〇三 **〔當願暮頭〕**

シテ暮頭(弟)。ツレ當願(兄)。ワキ志度寺住僧。ツレ從僧。所讚岐志度寺。當願暮頭といふ兄弟の獵師、山に出る途にて志度寺に法華供養あるを聞き、暮頭は之に參らんと云ひ、當願は山に狩せんといひ、終に山と寺とに相別る。かくて暮頭は供養に連りしが前業を悔いて忽ち一念の毒蛇となる。當願山より歸りて寺に到り、暮頭の毒蛇となれるを悲み上人に乞ひ誓願したるに、暮頭功德により龍女となりて成佛せり。(元寫) クセ九一〇

九丹後

六〇四 あまのはしだて **〔天橋立〕**(甲)

シテさいしやう老人。ツレ文珠堂童子の神靈(前には舟人)。ワキ東山吉田の僧。所丹波生野。丹後天橋立。時春。

吉田の僧九世戸に參らんとしたる途、生野にて神靈の化現に逢ひ、又吹飯ふけいの浦にて同じく神人の舟人に逢ひ、やがて到り着きて文珠の導により天橋立の奇特を見る。(新)

六〇五 あまのはしだて **〔橋立〕** 別名龍神橋立・祝言橋立・天橋立(乙)

シテ橋立明神。ツレ天女。ツレ龍神。ワキ橋立明神主。所丹後天橋立。時春。橋立明神の神事のうち、天燈籠燈の祭の夜、明神現れて神事を行ひたることを作る。(元寫、正、新)

【備考】音曲玉淵集に「われと狂ひいでたる物狂」の中に橋立を數へたるは此曲を指すには非るべし。

六〇六 あまのはしだて **〔獅子〕**(甲) 別名うてん王

シテうてん王。ツレ獅子。ワキ都の者。所丹後九世戸。時初夏。

都の者九世戸にてうてん王が獅子を引き立つる奇特を見る。(貞、元寫) 【備考】申樂談儀「能作書」に獅子又は獅子舞など見えたるは此曲にはあらで石橋をさすものなり。

六〇七くせのと【九世戸】 久世戸・九世渡

前シテさいしやう老人の化身。前ツレ同從。後シテ龍神。後ツレ天女。ワキ朝臣。所丹後九世戸。

丹後九世戸は天竺五臺山の文珠を勸請の地なればとて、朝臣こゝに參詣し、龍神の明燈を捧ぐる奇特に遭ふ。(觀、寶)

備考「能本作者註文」に小次郎作。

十 播磨

六〇八むら【室君】

シテ室明神神體。ツレ室君(遊君)。ワキ神職。狂言同從。所播磨室。時春。

室の明神の神事に室君達を船に乗せ雜物をなすことを作る。此神事の間室明神の本  
地韋提希夫人(シテ)の來現すること能にはあれど謠はなし。(觀、春) クセ

六〇九やすみてんじん【休天神】

前シテ須磨の里長の靈。後シテ天滿天神。後ツレいなづまの神。後ツレ岩やの神。  
ワキ旅僧。所播磨明石。時秋。

前 旅僧筑紫へ下る途、明石の浦に休らひ、休天神に參詣したるに、須磨の里長の靈出  
で、菅公がこゝに休らひし昔を語る。天滿天神、いなづまの神、岩やの神、各現れ  
て奇特を現す。(正)

備考名寄に休天神、談天人とあるは共に此曲名の誤傳なり。

十一 出雲

六一〇おほ【大社】

シテ杵築大神。ツレ天女。ツレ龍神。ワキ朝臣。所出雲大社。時十月。

毎年十月出雲に神々つどひ給ふにより、他國にては神無月といひ、出雲にては神有月



といひて神事あり。朝臣これに參詣して龍神が小龍を捧ぐる奇特を見る。(觀、寶、剛)

備考「能本作者註文」及「二百十番謠目錄」に彌次郎作。

六一二 出雲龍神

前シテ社人。後シテ出雲の神。後ツレ龍神。ロキ鹽冶五郎貞俊。トモ從者。狂言從者。所出雲大社。時十月中旬。

毎年十月中、出雲大社に龍神が小龍を捧ぐる神例あり。鹽冶貞俊出雲に詣で、此奇特を見る。(正)

六一三 神有月

前シテ手名槌。前ツレ足名槌。後シテ素盞鳴尊。後ツレ稻田姫。ワキ朝臣。所出雲大社。時十月。

當今臣下某、十月出雲に參詣して、手名槌足名槌の神より、十月は諸神出雲に集ひます故よそにては神無月といひ、此國にては神有月といふ由を聞き、又素盞鳴尊稻田姫に行き逢ひて神代の物語など聞くことを作る。(元、元寫)

備考「能本作者註文」に世阿作とあり。

三 筑紫

六一三 和布刈

シテ龍神。前ツレ龍神化身(海人少女)。後ツレ天女。ワキ早鞆神職。所豊前門司。時十二月晦日。

毎年十二月晦日早鞆明神に和布刈の神事といふことあり。此日龍神の化身來現して和布刈の來歴を説き、又本體を現じて神事の奇特を示したることを作る。(觀、寶、剛、喜)

備考「能本作者註文」に作者不明。

六二四 **【小手卷】**

小環・緒環別名豊後小手卷(豊後小田卷)・姫嶽(堀竹)

シテ姥嶽明神(大蛇)。ツレ姫。狂言姫の母。所豊後姫嶽。

豊後の片山里に娘あり。そこに夜毎に通ひ來りし男ありしが、娘の母、その男の何者なるかを知らんとて、娘に命じ緒環の糸に針をつけ男の直衣に刺しちき糸を手繰りて行くへを尋ねしむ。娘別れし朝糸に従ひて尋ね行くに、糸は豊後日向の境なる姫嶽の岩窟の中に入り居たり。かくて岩窟の口にて男の姿を見んといふに、出で來りたるは大蛇にて、首に立てられたる針に惱みて終に空しくなりぬ。此大蛇後に姫嶽明神と崇めらる。此曲は此明神の縁起を作れるなり。(元)

**備考**「能本作者註文」に河上神主(原註、和州十二太夫先祖)作とあり。類曲三輪と區別せんため、これを豊後小手卷といひ、三輪を三輪小手卷と稱したるなり。

六二五 **【香椎】** 別名さ、栗(篠栗)・磯童(いそのわらわ)・玉持(たまもち)

シテ磯の童と云はれし海神。ツレ川上明神、豊姫。ツキ藤原興範。所筑前香椎濱。

興範香椎の浦にて奇特に逢ひ、目のあたり神功皇后が三韓征伐に此濱より出でたしし昔の舞歌の曲を見る。(元、元寫) クセ

**備考**「能本作者註文」に香椎を彌次郎の作と記し、磯童を作者不明とせり。「飯尾宅御成記」に寛正七年二月廿五日觀世又三郎がいそのはらはを演じたること見ゆ。さ、栗を前半の綾としたるによりさ、栗といひ、シテの名によつて磯童といひ、後ツレの干珠満珠を持ちて瀬を鎮むることにより玉持と呼びしものなり。

六一六 **【玉鉾】**

シテ玉鉾の神靈。ツキ藤原俊家。所筑前鹿の島。時秋。

俊家鹿の島に渡り玉鉾の神靈に逢ふ。(元寫)

**備考**「能本作者註文」に世阿作。



筑前志賀の島の神職、御一體なる筑後の風浪の宮に詣でたるに、末社の神の化身現れて、当社が舟を守る神なること、神功皇后の異國降伏、劍珠の謂などを物語り、又龍神現れて舞樂を奉す。(寶生流古寫本『雜誌』能樂第十四卷第五號所載)

六二二【五穀】

シテ頗珊婆演底守夜神(五穀神)。前ツレ神の化身の從屬。ワキ吉田の神職。所筑後五穀の社。時秋。

吉田の神職筑紫に下り、五穀の神の奇特を拜す。(寶生流寫本『雜誌』能樂第十四卷第四號所載)

備考 謠本の奥書に、作者北村季文、副正林大學頭衡、節附寶生彌五郎友子(十五代太夫)、大鼓葛野九郎兵衛、小鼓幸清次郎、太鼓金春惣右衛門、笛一噌又六郎とあり。天保八年久留米藩に作られしもの、由なり。

六二三【高良山】

シテ牟禮權現の神靈(前は化身の老人)。前ツレ神の化身の從屬。ワキ紀〇〇(文字不明、原本に友則かとあり)。所筑紫高良山。時春。

城州男山の麓なる紀の某、高良の宮の靈夢に従ひて筑紫高良山に參詣し、牟禮の神靈の奇特を拜す。(寶生流古寫本『雜誌』能樂第十四卷第六號所載)

備考 曲名、諸名寄に出づ。

六二四【藤崎】

シテ八幡の神靈。ワキ源貞恩(恩は臣の誤にや)。所肥後藤崎。時暮春。

貞恩藤崎の八幡に詣でたるに、神靈現れて龍宮より奉りし鐘の古事を語り、又奇特を見す。(元寫)